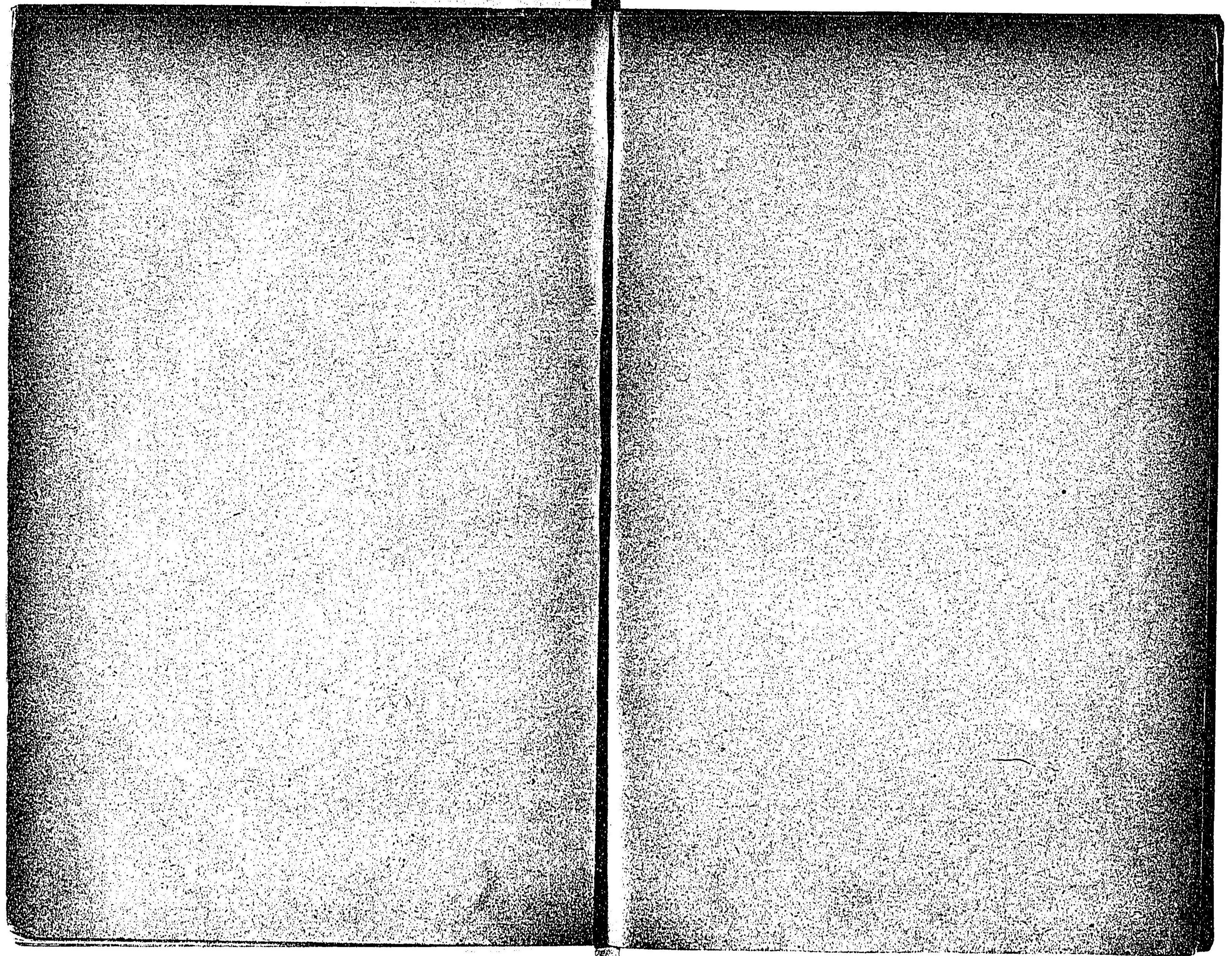


324  
78

金光教側面觀



34-75

早田玄洞著

金光教側面觀

發行所

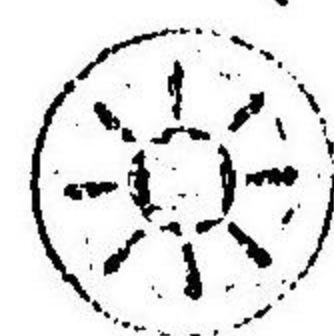
修身堂書店

41 4 15

明德

戊申二月

大陣顯



## 序

去歲七月、中國民報記者早田立洞氏來りて曰く、目下連載の黒住教祖の宗教に次ぎて、貴教に關する記事を社會に紹介せんご欲すご。予辭するに、本教の今日は未だ貴紙の爲に筆を執るの機運に達せず、乞ふ暫く之を俟てご。氏乃ち遮りて曰ふ、否、吾自ら金光教側面觀を物せんごするなり、之を諾ふかご。予聲に應じて、側面觀を物する、そは兄が意のまゝなりご、請により已刊の冊子二三を資料にごて贈りぬ。

越ねて十月九日に至り、金光教側面觀は其紙上に顯はれ、

○序  
此程完了したり。全篇を通じて一覽するに、其觀察の精緻にして批評の公正なる、之を極めて短少の時日に成りしものと思へば、敬服するの外なし。

頃日立洞氏之上梓せんごし序を予に需めらる。現下社會が宗教に着目すること切なる時に當り、本書の出づるは、宗教に志すものゝ研究に資する所多からんか。茲に本書と予との關係を述べて序に代ゆご云爾。

明治四十一年二月

吉備木綿崎山麓學園の傍にて

佐藤範雄

## 序

知友早田玄洞君得意の筆を揮ひて金光教側面觀を中國民報紙上に連載し、今又之を訂正上梓して廣く世に紹介せんとす。金光教の成立日尙淺くして教勢未だ内外に洽らず、本教内に於ても未だ組織立ちたる典籍なきが故に、往々淫祠邪教の列に數へ去らるゝことある時に當り、敏くも其の棄て難き金音を聞き付けて本教の門を叩き、その眞價を世に訂したるは、實に金光教の爲のみならず、一般宗教界の爲に其の勞を多とせざるべからず。由來宗教の批評研究は冷靜の頭腦を必要とすと雖も、亦一面同情の念を要す。蓋し自個本來の信仰に妨げられて思はざる固執偏見に陥ることあればなり。而して氏の玉を玉とし石を石として理を揚げ非理を排し、而も終止同情の念を離れざる態度は、既に金光教に首をさし入れていひ知れぬ甘露を味ひ、合理的信仰を得たる吾人に取りては、其の觀察が金札と鐵札と果してその何れを揚げんも、

固より何らの影響を感ぜざるものから、玉石混合の滅多打を喰はして願ざる所謂識者あるに比して、その慎重にして公平なるを稱揚せざるべからず。然り氏の金光教に對する見解は大體に於て公平なり。金光教の文壇未だ幼稚なる刻下、此著や門外人の側面觀なりと雖も、以て金光教概論と見るべきものなり。氏は觀察の側面を分類して、開教立旨ノ由來、金光教祖の人格、金光教の神、神と人との關係、信仰と修行、顯幽感道、人の本務、樂天主義、死生の安心、永生の十項目を立て以て結論に導きたり。滔々數萬言所論大體に於てよく肯啓に中れり。殊に「教祖の人格」は之を觀ること甚だ明確掌中の物を指すが如く、「金光教の神」は教祖の神に對する觀念の發展しゆく選路をよく觀たり。「神と人との關係」「顯幽感道」「生死の安心」はよく本教の特色を發揮したり。「人の本務」に於て金光教は家族主義の弊に厭ける我邦と、個人主義の毒に中てられたる歐州との間に、大中至心の道を開くものなりと觀破したる氏の卓見なり。而して全篇を通じて現はるゝ「一體金光

教が他の宗派に比して比較上常識的に出來上つてゐるのが吾等の賛成する所である」との趣旨は吾人の亦大に賛成する所なり。然れども詳細に之を査覈すれば吾人の見解と異なる所なきに非ず。その一例を舉ぐれば、氏は大體に於て金光教を樂天主義の上に立ちたるもの、而して其の放縱に流るゝの弊は信仰の徳を以て蓋梅調節すとせざるも、予は本教の基礎が人格完成主義(倫理學大したるもの)にあることを確信する者なり。又死生の安心、永生觀の如きは本教特色中の特色なり。何となく物足らぬ思あらしむるは讀者と共に大に之を遺憾とせずんばあらず。若し夫れ、氏よりも比較的深く金光教に接觸せる吾人の見を以て、大體に就て腹藏なき希望を述べたことを許さば、今一段精密にして組織シユクツクあるものを紹介し得べかりしを信す。

然れども氏の既に嘆じたるが如く、觀察に供する資料の極めて貧なりしことを思へば、此の如き希望は實は吾人の慾望なり。氏が窺ふことを得たる資料は僅かに一二の冊子に過ぎず。予も材料の供給を約したれど公務多忙にし

て漸く數節の断片的「理解」を申譯的に送りたるに過ぎざりしを耻づ。然らば此僅少の材料を用ひて短日月に此組織的側面觀を物したるは、却て氏の批評眼の凡ならざる現はすものにして、兎角の議論はあれ、其内外の人とはいへ、かく先鞭を拂ちて眞價を世に發揮したる其功績は没すべからず。本教を信するもの永く感謝の意を表して可ならずや。

金光教は未だ金光教として體系システムせられたる成文の典籍を有せず。然れども八十二個の信條の外、教祖の御理解として今日に傳はれるもの數百に餘る。断片的なりと雖も寸鐵殺人的の金言、窺ひ以てゆけば猶一層金光教の本義を覺ることを得べし。予は終に臨みて、氏の愈々清健にして更に深く本教の眞諦を聖靈の泉に探られんことを薦む。妄評多罪。

文學士 佐藤 薇 洞

### 金光教側面觀

#### 目次

- 題 字 ..... 一
- 緒 言 ..... 一
- 立教の由來 ..... 六
- 教祖の人格 ..... 二〇
- 神に對する觀念 ..... 四三
- 神と人との關係 ..... 五四
- 信仰と修行 ..... 五九
- 顯幽感通 ..... 七八



○人の本務	九〇
○樂天主義	一一三
○死生の安心	一二〇
○永生	一三一
○結論	一三六
○附録	.....

目次終

此の小論は曾て中國民報紙上に連載したものである。今多少の補正を施して一冊として刊行するは、世にいふ言訛のたぐひであらう。著者幸に緒言について微意の在るところを諒せられよ。

岡山市七軒町  
紅葉橋畔僑居に於て

著者識

戊申三月

# 金光教側面觀

早田 玄洞 著

## 緒言

法華宗不受不施派を政權迫害の間に掩護して、將に消えんとする法燈を明滅の理に維持せる、此の眞金吹く吉備の國は、神道に於て無住教の一派を開き、單純なる祖先崇拜より哲理的宗教の畛域内に一步を進め、水天髣髴の際に絶對唯一の神靈を認め、祖先教開展の先驅を爲して居る。之と踵を接きて興つたのが金光教で、立教開旨以來僅々五六十年の日子を閉するに過ぎないが、東京大阪の中央大都會より、西は九州、北は北海道と全國各所に分教會を設け、數拾萬の信徒を教壇の下に集めて居る、思へば吉備の國と宗教とは深い因

紙の結ばれてゐるものがあるらしい。  
 神道黒住教の開教年代はやゝ古きにも拘らず、是まで世の識者の耳目に上らなかつたは頗る遺憾の次第であるが、先には大阪朝日新聞の牧放浪氏が流暢明快なる筆を以て、數拾日に亘る長編を掲げて世に紹介する所あり。又同教の教師なる桑田無堂氏は懇切丁寧なる見解を中國民報紙上に掲げ、同教の趣旨を闡明したるは、眞に空谷の跫音といはなければならぬ。然るに獨り金光教に至つては其の活動布教の頗る目覺ましきものあるにも似ず、學者識者の側よりは全く冷淡に取扱はれ、甚まきは其の教旨の一節條をも吟味せず、蓮門天理等の淫祠邪教と一概にけなしつけて居るものもある。由來食はず嫌に物の眞味の分かる筈もなく、玉石混合の滅多打は、其の關係者に取りて此の上なき迷惑といはねばならぬ。金光教が果して蓮門天理などと同級にあるべき宗教界の寄生虫であるならば、摺擧さう

と蹴飛ばさうと人々の勝手次第、時と場合によつては吾等も御味方に馳せ参せぬものでもないが、何分の沙汰は一應の詮議を遂げた上のこと、輕率に耳食の輩に雷同することは吾等の得せぬ所である。さらば金光教とは如何なるものであるか、其の眞價を取極めるには、一應鍋の中の味を嘗め、更に之を他宗他門に比較して仔細の吟味を遂げねばならぬ譯であるが、元來宗教には門外漢の吾等、こみ入つて面倒な議論をする資格もなければ、其のやうなむづかしい大役を擔ふことは先づ以て御断り申し、只打見た通りのまゝを此處に持出して素人目の値ぶみをして見やうと思ふのである。題して金光教側面觀といふは、眞個の側面を見たばかりに過ぎぬからの名目で、なにも柄にない謙讓をした譯でない。尙一應断つて置くことは吾等が觀察に供した資料の極めて貧乏であるといふことである。實際同教は建立後、日尙淺く、現に昨年十月十日を以て教祖の二十五年祭を執

行した程のことであるから、たとひ其の教理の大本だけは既に定つたものがあるところ、萬般のこと混沌としてまだ原始状態に在りといつても差支ない。従つて教理に關する著書議論も先づ皆無の方で、纔に同教教監佐藤範雄氏の「天地の大理」と題する一書が出版されてあるばかり、吾等はそれに頼つて同教の門戸に入る唯一の津梁としなければならぬ。聞けば同教青年者間にはいろいろの議論もあるさうであるが、佐藤氏は拾數年間教祖に親炙し、立教開旨に参加した創業の大功臣であるから、同教の旨趣につひては、其の講説をオーゾリチーとするが至當であらう。

吾等は法華宗不受不施派の命脈を一縷に繋ぎ、黒住教の神道界に一機軸を出したるを以て吉備津國人の誇りとするを否まぬものである。之と共に金光教の勃興が同じく此の土地の名譽とすべきか、將た連門天理同等に識者の指彈にかゝり、可憐顔に泥を塗るものであるか。

紙札か金札か、はた賸造紙幣か。吾等は吾等の淺き觀察に依つて讀者の識別に幾分の資益を興ふるを得れば、それで十二分の満足を表はすものである。

社會の事  
務は必要  
に依て興  
る

## 立教の由來

上

大凡そ社會の事物は必要に依て興り必要に依て開展發達するものである。例へば人間は衣食住の三つのものが完備しなければ立派な生活を送ることができぬに依つて、耕作や牧畜や漁獵や紡織や裁縫や木工や石工や其他諸般の農工業が、數千年の昔に起つて、次第に發達して現在の狀況となり、猶今後も駁々として進歩しつゝある。而して事物其ものが必要の區域が廣く、必要の度合が強ければ、其の廣いだけ強いだけ發達上進も著しいのである。之に反して一旦必要があつて興つた事物でも、其の必要の事情がなくなると共に、進歩發達を止むるのみならず、次第々々に消滅して了ふのは當然のこととて、例へば昔時交通不便の時代に、東海道五十三驛を初め、諸國

立教の由來

の宿場に跋扈した怨龍昇雲助も、人力車ができ馬車ができ、進んで鐵道が敷設せられてからは、今は全く其の影を失つて了つたのである。宗教もやはり人間社會の一現象であるから、此の興廢消長の原則を免がれることができない。

試に日本の佛教につひて見るも、昔者は天台眞言の二宗が佛教界の全權を占め、叡山と高野山とは信仰の燒點となつて居たものであるが、世の中の變遷に従ひ、此の二宗ばかりでは到底衆生化度の効果を擧げることがむづかしくなつて來た。そこで一遍上人の時宗、法然上人の淨土宗、榮西禪師の禪宗、親鸞上人の一向宗、日蓮上人の法華宗など續々と現はれ、それ／＼の方面から、衆生の機根に應じて教化を施すことゝなつたのである。譬を引くも少し不倫であるが、世に淫祠邪教と排斥されて居る逆門教天理教などいふ類のものさへ、今日見る通りの信徒を有ち、好かれ悪かれ布教に従事するあ

○立教の由來

○立教の由来

るのは、それ相應に興るべき發達すべき理由を有つて居る。其の一端を擧げれば、徳川幕府三百年間、政權保護の下に全國の教權を獨占した佛教が、或るものは偷安姑息に流れて教導の力を失ひ、或るものは徒らに高尚に馳せ、多數の凡俗を化度するに全く不適當なつて、衆生は恰かも水上の浮草のやうに、安心立命のよるべきなごさの方角を失つた其の間隙に乗じたものと見るがよい。然し此のやうな餘り香しからぬ教は、他の立派な教の普及するに従ひ、次第に其の必要を失つて、果ては寂滅して了ふことは受合である。更に立派な例を擧げて見れば、釋迦牟尼佛が中天竺に興り、大慈大悲の教を敷かれたのも、當時婆羅門教の僧侶が社會の階級に拘泥し、下層社會や婦人を全然人間として取扱はぬといふ大弊害を除き去らうとて、平等利益を主張されたのである。耶穌基督が小亞細亞の一地方に興り、天の使命に依つて崇高な愛の教を敷かれたのも、同

金光教は如何なる必要に迫りて興りたるぞ

じく猶太教の缺漏を補はれたのである。

そこで本題の主たる金光教の教祖が、備中淺口郡大谷の片田舎に教壇を築き、當時の神道界中に全く別個の機軸を出したのは、どういふ必要に迫られたのであらうか。而して其の教旨が次第に開展發達して、全國到處に分教會を設け、數拾萬の信徒を教壇の下に集め、嚴然として宗教界の一部分を占領し居るの形勢を示しつつあるは、抑々如何なる必要を充たして去かく社會多衆の信仰を得て居るのであらうか。吾等は主として此の點について觀察を試みやうとするものである。

然しこゝに一言斷つて置くことは、金光教教祖が開教當時の日本と、明治四十年の今日の日本とは、全然社會の狀態を異にし、文化の普及の程度も殆んど雲泥の相違あるは、讀者の既に知了せらるゝ所で、吾等が金光教々祖開教當時の必要を列擧するも、其の必要が依然と

○立教の由來

○立教の由來  
して今日まで残存してあるとはいふのでない、只金光教の原始の原  
始が如何なる境遇に興つたものかを述べるに過ぎない、其の後の發  
達状態は勿論次に々と述べるつもりである。

中

吾等は金光教祖の遺訓と佐藤教正の著書とを讀み、立教開旨の初  
に當り、教祖の心盤が二個の動機に接觸せるを認む。即ち其一は當  
時の神官僧侶が全く自己の本分を忘却し、迷妄の說を以て人心を  
惑するを憤慨するに出で、其二は當時の人心は墮落に墮落を重ね、  
殆んど人間の人間たる價値を失墜せんとするを心配したが、金光教  
開立の原由となつて居る。彼は一世の衆生を迷途に引入れんとする  
の悪魔、即ち當時の神官僧侶輩の前面に大手を廣げて、汝の本分に  
返れと命令し、又一世の衆生惑溺の淵頭に立つて、其の慈悲の手を

垂れて、我にすがれ、我れ汝に轉迷開悟の法を與へんと叫び出した  
ものである。吾等當時の状況につき、こゝに詳しく描き出すの餘裕を  
有たぬが、只其の一斑を擧げて吾等の觀察の虛妄でないといふこと  
を証明しようと思ふ

「心だにまことの道にかなひなば、祈らずとも神や護らん」と菅原  
道真卿の歌にある通り、祈らなければ神が感應ましまさぬといふこ  
とはない。畢竟祈禱といふことは元來宗教上の形式に過ぎぬのであ  
るが、此の形式は東西各國を通じて神人交通の手段と認められ、既  
に宗教の存在する以上は祈禱は必然これに伴ふものとされてある。  
然し祈禱にもいろいろの階級があつて、敬虔に嚴肅に自己の真心を  
神に聞かせる高尚なものあれば、壹厘貳厘のはした錢を賽錢箱に  
抛り込んで、家運長久、商賈繁昌、息災延命と數限りなき慾張りを  
並べ立て、神様の鼻摘みに遇ふやうなものあれば、甚いものにな

○立教の由來

○立教の由来

ると聞くもばか／＼しい念願をかけて、あべこべに神の御怒りを受  
けるのも少くない。世の神職僧侶などいふものは、其の職責とし  
て此のやうな衆生の迷ひを解き、正しき道に立ち返らせることに勉  
めなければならぬのでありながら、末世の賈僧、無識の神職どもは、  
口から出まかせのごたくを並らべ、凡俗の迷ひの火に薪を添へ油を  
かけて、焦熱地獄の眞ッ只中に叩きこみ、剩さへ亡者の懐に手をさ  
しこんで、何でもござれとくすねる奴がそんじよそらにごろ／＼  
と轉がつて居る。こそで神人交通といふ立派な宗教上の形式も、下  
落に下落し、汚れに汚れて、全然反對に神と人とを絶對に隔離する  
結果を現はし、極樂天國の道案内が、さんでもない地獄に誘ひ入る  
やうな始末、かうしたものが、明治維新前の日本には、其處にも此  
處にも蔓つたものである。

當時迷信  
の数々

雑多の迷信が起つて来る、此等は印度の婆羅門、支那の道教などの  
中にある迷の種が海を渡つて日本に播かれたものに相違ないが、元  
來が迷ひ易きが人情で、いつの間にもやうやう全國の津々浦々まで押し廣  
まり、病氣をすれば醫者より先に山伏に馳せて行く、家を建てる  
にも旅立をするにも婚禮をするにも、何でもかでも修験者の厄介と  
なつたもので、果は衣服を裁ち洗濯をするまで、一々其の吉凶禍福  
を詮索して、てんで話にならぬ程に迷信が高じたものである。  
愚にもつかぬ吉凶禍福の妄執が當時の人心を束縛して、てうど蜘蛛  
の巣にかゝつたやうに、自由に身動きも出来ぬ始末であつた。其の  
証據には堂々たる官曆にまで、其の中段下段に其日の吉凶とか星と  
かを麗々しく書き入れて、一層人心を蠢感したのを見ても分かる。  
實に當時は重病にかゝつて今に息を引取らうとする人も、今日は日  
柄がわるいといはるれば、苦しくとも死に切す。産婦が陣痛を起し

○立教の由来



○立教の由来

て、今にも出産するといふ騒ぎの時にも、産部屋の方角がわるいとか、星當りがどうとか、いろ／＼の故障があつて、苦みを憶へて持こたへなければならぬやうな、死ぬにも生れるにも不自由千萬なもので、今から考へれば臍に茶を沸かす程のことも、真面目に世の中に承認されたのである。

金光教々祖が立教の動機の一は、憐むべき衆生を此等の桎梏から解放し、身體精神に動作の自由を與へるに在つたのは疑を容れない。彼は

普請、作事、縁談、縁組、自由勝手たるべし。

迷信打破の宣言

と宣言し、又

縁談に合性を見合はすよりは、眞の心を見合せよ。

と戒め、更に曆の迷信に關しては、

曆の中段下段にある日の吉凶は問ふに及ばぬ。

當時の墮落せる信仰界 修驗者の跋扈

と喝破された。此等のことは今日に於てこそ平凡にして他奇なけれ、當時の暗黒世界に於ては確に天來の光明、救苦の福音たるに相違ないのである、吾等は先づ此點よりして金光教々祖が當時の俗流を踏ねて卓越なる識見を具有して居つたことを認めなければならぬ。

下

次に聊か方向を轉じて當時の信仰状態を見るに、先きにもいつた通り佛敎は政權保護の下に腐敗して、正法の活動がひたと止て了ひ、之に代つて修驗者即ち山伏の一派が時を得たりと跋扈したもので、當時備前國兒島郡に五流といふ山伏寺があつて、地方での本山と仰がれ、京都の聖護院三寶院の宮を頭に戴いて、金紋先箱といふ小大名の資格、其の權威は凄しいものであつたといふことである。而かして此の山伏がごんな事をするかといふに、加持祈禱（今でも日蓮

○立教の由来

宗などにはこんな坊主もある)をやつて、盛に人の迷信を煽つたものである。中にも幣附祈禱(のりくらともいふ)といふは、最も馬鹿氣切つたもので、是は老年の人は知つて居られるであらうが、簡短に説き明せば、凡そ人間の病氣又は災難は皆死靈生靈の祟りである(或る場合には狐狸犬猫などの祟りもあるといつたものだ)。かゝるが故に病氣平癒、悪事災難を除けるには、其の祟り物の何なるかを知り、其の因縁に依つて之に満足を與へなければならぬ。其の方法は一個の乗臺と稱するものを設け、之に幣を持たせて中央に坐らせ、多くの山伏共が其の周圍を繞りて、何やら呪文様のものを唱へ、祟りの怨靈や禽獸を乗臺に乗り移らせ、其の口から祟り者の名ど、祟る因縁とをいはせ、其の申分に依つて種々に満足を與へる方法を行ふ、是が所謂幣附祈禱で、一名稻荷下げともいふものである。此の様な無稽な馬鹿氣切つたことは、今なら何人も一笑に附して居

るが、當時無智の輩は無性に難有がつたものである。それから同じ山伏等の崇めて居る神?體にも亦無類飛切の馬鹿々々しきものがある。狐狸狼蛇などの種類が最も多く到る處に祭られた。いや今でも此の類は決して少くはないが、人智の進歩するに従つて次第に消滅するであらうが、維新前に在ては此等の淫祠は、正當の祠廟を壓倒するの勢を示し、社會人心を穢弄したものである。畢竟人間は自己が萬物の靈長たるを忘れて、埒もない獸や虫を禮拜して居る有様であつた

勿論上擧の迷信は決して日本に限つたことでない、人若し一部の宗教進化史(有賀博士の著あり)を繙いたなら、世界各地ともに此等の例証の乏しからざるを見出すであらう。畢竟宗教の起源と云ふものは此のやうな幼稚の思想が土臺となつたものであるかも知れぬが、十九世紀の日本、殊に比較的形而上學の進歩して居た我邦の五六

○立教の由来

十年前に、太古の野蠻的宗教が流行して居つたとは苦々しき次第といはねばならぬ。そこで金光教祖は  
人は人たるの徳を失ひ、狐狸をさへ拜むに至れり。  
と悲み、

祓詞にある如く、人は天下の靈物なり、須く謚め静まるべし。

と、端的、人間の本分を指示し、進んで天下萬衆に對し

我が教の昔に返れよ。(昔とは本をいふ)

と命令し、而して

一面、他の山伏輩が狐や犬を神の使者と稱し、人間に神意を傳へる媒介者としたるに對しては、

此方は神の心を神の氏子に直々に傳ふるの道を開く。

と宣言し、迷信彌漫の世界に立つて、信仰向上の宣傳に従事し始めたのである。

之を要するに金光教々祖が立教開旨の動機は、迷海に感溺せる衆生を憐れと見、轉迷開悟の要津を指し示さうとするに起つたものと見て間違なからう。故に之を反面から見るときは當時迷信の本来本元たる山伏の不埒を憤慨し、對抗的に自己の信念を宣傳したものと云ふことができる。尙一言附加へて置なければならぬことは、當時の迷信は上述の如き有様であつたとはいへ、日本全國の上下を通じて皆々其様に感溺したものと云ふでない、少くとも當時の學者社會は超然として此の汚れたる塵の表に立つて居つたことは事實であるが、彼等は只己れ一身を潔くするに止まり、多衆の迷妄に對して徒らに冷笑を浴びせかけたばかりで、一人も起つて之を迷ひの海の中から救ひ出さうと試みたものがないのである。金光教々祖は學者では無い、有體にいへば只の百姓である、此の只の百姓が敢然として衆生濟度の大念願を起したと謂事は比類少き勇猛精進といはねばならぬ。

○立教の由来

○教祖の人格  
一  
教祖の人格

凡そ一教一派の教理といひ規範といふは、其の教祖の垂示せる遺訓に依ること勿論であるが、眞個活動の源泉は之を教祖の人格に汲まなければならぬ。例へば佛教が二千年來亞細亞大部の人心を支配し、今日に至つては稍々西漸して、歐洲各邦に浸染するの勢を致しつつあるは、教祖佛陀の偉大なる人格が未來際に感化力を有するに由る。基督教は其の教理に於て佛教の後塵を拜するにも足らざる淺薄のものでありながら、全世界を通じて殆んど布教の種を播かざる所なきの有様なるは、最も適切な例證と爲すべきもので、實際基督教の生命は全く教祖の人格に在るといつてよろしい。我國に於ける日蓮宗が他宗に比して猛烈なる性質を有し、動もすれば法論法戦を開かう

活動の泉  
源は教祖  
の人格に  
在り

一宗開祖  
の傳記に  
筆墨多し

○教祖の人格

とする傾向を有するが如きも、全く開祖日蓮上人の人格に根源するものであつて最も手近の好例証である。そこで金光教々祖は如何なる人格を有して居た人であつたらうか、之を研究するのは金光教を觀察するに於て極めて必要のことである。いふまでもなく他の人格を見るときは至難のことである。殊に一教一派の開祖といふやうな人になると、其の教統を繼ぐもの、其の教旨を信するもの、或は政略上の手段として、或は信仰上の阿諛よりして、勝手次第に金銀五色の色彩を塗りつけ、次第にありし眞面目を没却して、古代の神話に残つて居るやうな半神半人の不思議な人物に仕揚げるが多いから、例の奇蹟とか何とかいふ妄誕無稽は暫く抜きとするも、なか／＼以て赤裸々の真相を看破するのが困難である。然るに金光教祖は其の存命が明治の年代にかゝつて居るのみならず、比較的妄誕の附會が少いだけに、他教他宗のそれと

教祖の眞  
籍  
教祖の教  
育程度如  
何  
教祖は只  
の百姓に  
して且無  
學なり

○教祖の人格

頗る趣きを異にして居ることは、人物觀察に於て甚だ便利であるが、それがために教祖の人物が大かた平凡になつて難有味（實は迷信の）が少いのは氣の毒である。

先づ此人の戸籍から調べ上げれば、生れは備中淺口郡の占見村の農民香取重平の次男で幼名は源七、通稱は文次郎、文化十一年に生れたと書いてある。そして文政八年即ち十二歳の時に同郡大谷の川手久米治郎の養子となり、天保三年に國太郎と改名し、後に亡父の遺言によつて赤澤と改姓した、其の金光大神と名乗つたのは、信仰修行が餘程進んだ後の事である。此人幼時の事蹟は詳でないが、温厚篤實な少年であつたらう。其の生家といひ養家といふも勿論尋常の農家である、吾等が前回に於て此人を只の百姓といつたのは其のためである。此人の教育程度は、どんなものであつたらうか、佐藤教監を初め之に親炙した人々は、今日之を明言するを憚かつて居るから、

確としたことは知れないが、若し相當の教育があつたとしても、當時農家の慣習として、庭訓往來とか實話教とかいふ位のを讀ましたに過ぎないことであらうと思はれる。現に金光教祖が殘されれない。佐藤教監は教祖の修行は心行を主とされたと説いてあるに依つても、教祖が特別の外來教育を受けなかつた、寧ろ無學無教育であつたといふことが分かる。但し吾等が只の百姓といひ無學といふのが、決して其人を侮辱する意味を含んで居ない。例へば耶穌基督がナザレの片田舎の大工の子で、無學文盲の人であつたといつたところが、基督の人格の上に何等の影響を及ぼさず、基督は依然たる基督たると均しく、金光教祖が只の百姓であれ、無學であれ、其の人格に於て損益する所がないのである。

さて此の只の百姓で無學な人が、始めて道に志したのは二十八歳の

○教祖の人格

○教祖の人格

時で、爾來農業の片手に世間の迷妄を説破しつゝあつたが、三十九歳の時即ち嘉永五年に、一種のインスピレーションに依て天地の大道理を感得し、前編にいへる如く「神の心を直々に傳ふるの道を開く」と宣言し、安政二年九月十日を以て新一教派を開き、爾來茅屋の六疊間に端座して、一意専心に教旨の宣傳を勉め、三十餘年一日の如く、明治十六年十月十日を以て長逝したといふことである。履歴は此の如く簡單なもので、他の立教開旨の豪傑の一生が雷電轟き疾風叫び、雄大悲壯にして天地の偉觀を集めたるに比ぶれば、誠に平凡にして他奇なく、恰かも平坦砥の如き道を一跨きに隣から隣へ往つたやうなものである。

二

凡そ宗教家として第一に欲くべからざる資格は自尊心である。佛陀

は天上天下唯我獨尊と唱へて、自ら人天の大導師を以て任じ、基督は我は神の子なりと稱し、我邦の日蓮は鎌倉の大道の中に突立つて、我は釋尊の使者なり、上行菩薩の化身なりと叫んだのである。古來禪家の法に上堂の式といふがあつて、和尚自ら須彌壇の上に坐して說法することもあるが、徳山などいふ坊主になると、本尊様を庫の隅に抛りこんで、毎日自分が須彌壇の上に胡座をかいて、大衆を眼下に見下して獅子吼したものである。モハメットなどが何といつたか知らぬが人の話では釋迦耶穌以上の傲慢（非徳の意味でない）な男であつたといふことだ。そこで金光教祖はと見れば同しく自尊心の強い人であつたことは疑ひを容ぬ「此方は神の氏子に神の道を直々に傳る」と宣言し、居然として神人間の仲介者を以て自任したのである。

○教祖の人格

自尊心はある場合には徳の累を爲すことも少くないが、それは卑劣

○教祖の人格

な性情動機から來るものに多く、眞個に孤峯頂上に踞坐し、俗塵を  
超脱せる自尊は、飽まで崇高に、飽まで尊嚴なもので、温良恭儉讓  
を以て目せられた孔夫子さへ、賊の爲めに迫害せられたときに「天、  
徳を我に生ず、此奴等が我をどうするものか」と叫破せられたこと  
がある。古來の英雄聖者が巍然として奪ふべからざるの大勇は、皆  
此の自尊心より發射する光輝と見なければならぬ。近頃金光教會か  
ら出版した『金光教』といふ小冊子の冒頭に教祖の傳記ある、其の  
中に

迷信固陋の輩、四方より起りて教祖を非難攻撃し、或は白刃を擬  
し、或は毒殺を企て、迫害至らざるなし、而も屹然動かす、妨害  
者の罪を神に謝びつゝ平然として大道を宣傳せり。  
と書いてある、言辭が餘り概括的で、どのやうな事のあつたのか知  
り惜いが、いづれ例の五流の山伏共が猜疑嫉妬から來た迫害だらう。

自尊心と無學

此の迫害を迫害とせず、優悠の裡に自家の教旨を宣傳し、少しも急  
遽狼狽の態なかつたことは、此の僅の文字の中にも知られる。是は  
崇高な自尊心のある人でなければ到達し難い境涯である。  
吾等は前に金光教祖を無學の人と評したが此處にも其の無學を引合  
に出さなければならぬ。元來自尊自信といふことは半可に書物を讀  
み、世界古今の事情を知つたものには乏しいものである。進化學者  
が人は萬物の靈長といふ古來の套語を捉へて、人類の誇大狂（正博  
士）と嘲るが如き、其の學問より得た知識が、自ら傲慢の地位に居  
ることを許さぬのである。又新しい洋行歸りのハイカラ共が、兎か  
くに、日本の物事をけなしかゝる傾向あるのは、歐米の物質的文化  
に酔うたばかりでなく、實際上の比較がものにならぬことの多いが、  
歴々と目につく結果である。そこで佛陀の如き絶學無漏の位に進入  
した大偉人はさて置き、古來大なる自尊心を有つて居た人に無學の

○教祖の人格

○教祖の人格  
人が多いいといふ道理は分かる筈である。金光教祖の如きも亦其の一  
人で、悪くいへば井の中の蛙であるが、光輝ある方面から之を見れ  
ば、上根上智の人が、機に觸れて頓に心眼を開き、其の見得せる宇  
宙の理に體達したといふ信念を以て、其の自尊心の根柢をまつかと  
養つたものである。

三

崇高無比の自尊心は確乎不動の信念を基礎として、其の上に築かれ  
ねばならぬ。釋尊成道の曉に『一佛出世、草木國土、悉皆成佛』と  
喝破し、基督が『吾は道なり力なり』と説かれたのが、單に抱負の  
大なるを現はすばかりではあるまい。此の二理の胸底に深く潜める  
大信念が、折に觸れ物に應じ、雲間を洩る太陽の光の如く閃き波つ  
たものと見るがよからう。確乎不拔の信念なくして徒に陀法螺を吹

き、愚にもつかぬ自衛自讃に得々として居る瓦落多ものが、世の中  
に塵塚に山を成す程なるが、それを鍾半文に買ふ呆奴もないが何よ  
りの証據、如何に盲目千人、目明一人の社會でも、いつでも味噌と  
糞を一しよにするものでない。そこで金光教祖の信念はどうであつ  
たらう。

安政二年の立教開旨の劈頭に於て。

「氏子の犯したる罪は我が身に負ひて修行すべければ悉く宥して眞  
の神の道に進ませたまへ」

と神に誓はれたといふことである。東隣に太鼓を打てば西隣に鐘を  
打つ。釋尊基督と全く同巧異曲といはねばならぬ。佐藤教監の談に  
いふ。

教祖一日香を焚て神を禮して坐はす、余間ふ金光教は一部神道で  
ござるか、二部神道でござるか、はた佛道でござるかど、其の時

○教祖の人格



神道も知  
らず佛道  
も知らず

○教祖の人格  
教祖は「俺は神道も知らぬ佛道も知らぬ只天地の大道を傳へるばかりだ」と大喝された。此の時の一喝は眞に雷霆の威あり、覺せず塵一じやうばかり飛び退つて懼伏したが、全身冷汗を流してびつしよりとなつた。

「神道も知らず佛道も知らず」端的是れ無學、然しながら「只天地の大道を傳ふ」正に知る眞人は學問を借らず、此の須彌を摧破する底の手腕を具有することを。これが大信念の確立した人の以外に爲し得る作略であらうか。又云ふ、

教祖ある日の夕暮に祈念を凝らされてあつたが、たまく神前の提灯燃わて下に落ち、種々の供物に火が移つた、侍坐せる人々水よくと口口に叫びしに、教祖は「噪ぐな」と一喝し、依然として祈念を續けられた。其の内提灯は勿論、燃わ易き供物は皆燃わて了つたが、教祖は靜に侍坐の者に向つて「此の灰燼の中を改め

至誠は焚  
けず

て見よ至誠あるものは燃わすにあらう」と申された。  
泰山前に崩れ、滄海後に溢れても、びくともせぬ、不動不退轉の大精進力はかゝる場合に於て最も善く現はれるものである。

教祖の遺訓中に左の如き言葉がある、  
疑を離れ、廣き眞の大道を開き見よ、我身は神徳の中にいかされてあり。  
光明遍照、十方無礙、攝取不捨、廣大無邊の神徳を見得し、心身を捧げて歸命するといふことは、半可識や小伶俐なものには決してできぬことである。

四

次に吾等が金光教々祖の人格に於て認め得ることは寛容の徳である。古來東西の宗教家が自己の教旨を宣傳するに當り、動もすれば他を

○教祖の人格

寛容

○ 教團の人格

排他し、甚しきは惨烈なる戦争を惹起したことは歴史上の事實である。佛教に於ても外道（佛教外のもの當時の婆羅門等の如き）と惡魔とは殆んど同じ意義に見られ、烈しき論争が幾世紀も繼續したものである。又耶穌教になると此の排他主義は一層激烈で、其の原始時代に於ける摩西の律法に於てエホバの神は自ら「吾は嫉妬の神なり」と公言し、其の信徒の他の神佛を拜することを絶対に禁止したものだ。總じて歐羅巴に於ける騒亂といふものは、皆宗教上の排他主義の勃發で、十字軍の昔から新舊兩教の衝突等、數拾萬人の血を流した歴史上の大動亂を起したことは誰でも知る事實である。そればかりでなく羅馬教全盛の時代には、其の餘沫は科學哲學にまで及んで、不朽の大學者にして焚殺の慘刑に遇つたものも少くない。近く北米合衆國や英領加奈陀に於ける日本人排斥論の盛なのも、此の根底の感情衝突に、經濟上の競争を加味したもので、耶穌教内に於

ける異教徒といふ言葉は、我が國の人外とか人非人とかいふ言葉と其價値を同じくして居るのである。蓋し宗教家が自家の宗旨を鼓吹する熱情の程度に比例して、排他主義の發現に強弱を異にするは自然の勢で、我邦に於ける佛教中に在つても、日蓮宗の如き熾烈な宗旨になると、例の四個の格言——念佛無間、禪天魔、真言亡國、律國賊（流石に本家の天台だけは除けものにして）——といふやつを眞ツ向にかざして、八方に向つて喧嘩を賣つたもので、是れが祖師以來子孫相傳の折伏と稱するものなさうな、従つて其の信徒の中の凝り固まりとなるとき、他宗他門とは婚嫁は勿論、平生の交際をも快くせぬといふ極端な攘夷主義となるので、強がら歐米無識社會の偏狹を笑はれない。此の點から見ると世界の二大宗教たる佛教も耶穌教も頗る不感服のものといはねばならぬ。然し釋迦や基督が果して其のやうな偏狹至極な排他主義の固陋漢であるとは吾等も信じて居る

○ 教團の人格

○教祖の人格

のでない、つまり末世末派の族が角を矯めて牛を殺すやうな仕方となつたのであらうが、さりとて一教の開祖として、豫め此の必然に起るべき罪業を戒めるだけの遺訓を垂れなかつたのが手落ではあるまいか。是は吾等凡夫のおこがましくも佛耶の二聖に對する批駁を遠慮することができぬ理由である。

金光教祖を佛耶の二聖に比するは恐らくは燈火を日月の傍に置くもとの非難を免がれまいが吾等の威服を禁じ能はざるは他宗他門に對する態度である、『道教の大綱』に、

金光教の他教に對する態度

我信する神ばかり尊みて、餘の神を侮ることなかれ。

と訓戒してある。此の訓言を例の一神論者などにはせたらん種々の非難を持出すであらうが、吾等宗教の門外漢から見るときは、如何にも尊敬すべきものと思はれる。實際一個獨立の教派を開き、若くは他から之を輸入するに當つて、此のやうな寛大な雅量を示した

熱

ものは他になからう。我邦の上代に於て佛教と神道との衝突を緩和するために、本地垂迹の説を立て、兩者の調和を謀つた弘法大師のやうな人もあるが、元來一時の方便手段で、佛教其ものよりは眞面目に認定すべきものでない。然るに金光教々祖は此の如き姑息なる方便を排し、傳道宣教の不利をも顧みずに、敢然として此の不磨の金言を垂れたのである、吾等が尊敬を表するも無意味であるまい。

五

以上の外に凡そ宗教家として缺くべからざる要素は熱である。此の熱や自己に接近する萬物を焚盡して灰をするの力を現はすばかりでなく、場合に依つては自己自身をも焚き盡すものでなければならぬ。釋迦が四拾餘年間、東奔西走して八萬四千の法門を宣傳したのも、聖保羅が獄に下つても傳道に怠らなかつたのも、親徳日蓮が配處に

○教祖の人格

○教祖の人格

於て衆生化度に全力を盡したのもいづれも此の熱の作用である。物理学の教ふる所に依れば、物質の熱には顯熱と潛熱と兩種の區別があるといふことであるが、宗教家の心理的作用に起る此の熱にも亦二種の區別が存在するを認め得られる。試に佛教宗派の内に例を取れば、日蓮宗の如きは何人も看取し得る通り最も陽性的のもので、烈々たる火炎は祖師以來の身邊を圍繞し、他を焚き能はずんば自ら焚かんとするの概を示して居る。之に反して禪宗各派は、其の外観からいへば如何にも冷に、如何にも靜に、深山幽林に湛ゆる池が紺碧の水を漲らし、風も戦かす魚も躍らざるの趣に見ゆるが、さて其の内部に立入つて見ると、猛烈なる大火焔が、恰かも地心の火の如くに燃わて居ることは争ふべからずで、初祖達磨が少林に於ける九年の面壁を以て、雪中斷臂の二祖を接待し、我が永平道元が紫衣を辭して越前氣比谷の谿谷に遁跡しながらも、即身即佛の頓教を全國

に弘通したる如き、潛熱的宗教家の好個例証として擧ぐべきものである。

そこで金光教祖は顯熱潛熱のいづれに屬する人であるかといふに、吾等は潛熱の人であると答ふるを至當と信する。近頃佐藤教監から寄贈せられた『説教拾遺』を讀むに中に左の如き一節がある。

我が教祖の神の道の傳へ方はこれ（黒住若くは禊教を指す）と趣が全然で違つて居る、我が教祖が神の道を傳へたまひしは、山にも登らず川をも渉らず、藁屋の下、六疊一間の中に、三拾有餘年の間、靜坐して斯の道をお傳へなつたのである。然し三拾有餘年の間、敷居三寸外に出たまはずと傳へてあるけれども、其の中只一回外に出られた形跡がある、それは教祖の在したる備中淺口郡大谷といへる處は、淺尾藩即ち蔭田家の領分であつたから、或る年の正月元日に年賀として淺尾まで參られた、其の駕籠が今に保

○教祖の人格

○教祖の人格

存してあるから、是は確かな事であるだらう。

觀來れば金光教祖の傳道方は達磨の壁觀主義と全く一致して居るではないか。又『金光大教』の傳記中に、

明治五年制度の變革ありて教祖は神主の資格を失はれたり、有志のもの或は教導職にならせたまへと勸めたるも『至誠、神に奉仕して人を助くるに職名は要なし』とて聽きたまはず、爲に警吏は迫つて信徒の叅集を嚴禁したるに『人を助くること惡しくは引籠らん』とて、一時廣前を退かれたり。

と書いてある。つらく之を味ふに、溫然として玉の如き言葉の中に、犯すべからざる熱を含んで居ることは、吾等が説明を俟たぬ所であらう。金光教祖が潜熱的の宗教家たりしことは、此等の零碎の事實に依るも極めて明かであるが、更に此の性格を明白に説明してあるのは彼れ自身の訓戒である。見よ、

教祖の人格

此道の爲めに迫害を蒙ることあるも、人力にて逃れんと企つること莫れ、假令顔に汚泥を塗らるゝとも忍べ、即ては神其顔を洗ひ清め給はん。他教の配下に屈服ば神の徳は現れざるべし。(佐藤文庫上 所輯材料)

此は是れ信徒に垂示せられた訓言中の一節に相違ないが、凡そ宗教家が人を教ふるには先づ己れ自ら實行するを要するからには、教祖は勿論此の訓言を躬踐した人でなければならぬ。之を要するに金光教祖は敬虔なる敬神家たると共に自尊自信の念極めて強く、特立獨行して他の力を假らず、他の援ひを求めず、迷信滔々たる社會の中央に自己の城廓を建設した人である。上智上根にして、學問の力に依らずに覺知の域に進み、他の門牆を通らずして一派の教義を開いた人である。然しながら其の性格は内方外圓にして圭角少く、殊に他教派に對する態度は殆んど他に見るべからざるほど寛容の雅量を示して居る。而して其の活動は潜熱的で、日蓮や

○教祖の人格

○教祖の人格

基督に見る如き灼熱たる白熱を現はさざる代りに、他に對する衝突は比較的少なく、平和の間に宣教の素地を造つたのである。金光教祖の人格については他にも猶いふべきものなきにあらざるも、以上に列擧したものは殊に金光教の教義、并に現在の宗勢に最も大なる關涉を有つて居るらしく考へられる。故に人若し金光教祖の此等の性格を十分に會得したならば、所謂金光教祖なるものは如何なる素地の上に建設せられ、如何なる方向に向つて化醇しつゝあるかを知るに於て思ひ半に過ぐるものあるであらう。金光教祖は其の在世の當時に於て多數の信徒から生神として尊崇せられ、死後の今日に於て其の教義次第に傳播し、過般其の二十五年祭を執行するに當り、全國より子來せる信徒の數は幾萬を以て數へられ、淺口郡大谷の靈地（彼の教徒の）は爲に人を以て埋められたほどの盛觀を呈したのであるから、其の流風餘澤の芳ばしく、深く

人心を感化するの力を殘されたることはいふまでもなき次第で、之に依りても其の人格の高くして且つ大なるを知られる。然るに世間に理窟屋と稱する連中があつて、何事にも能くケチをつけたがるが、金光教のこの字も研究したこともない癖に、邪教の淫祠のと小伶俐さうに得手勝手な屁理窟を並べるが、氣の毒なことには彼等如何に味噌と糞とを一つに捏ねて、百萬陀羅のボロクソを唱へたところで、高人は飽まで高人で、到底其の價値の一分一厘をも減ずることができぬ。吾等をして率直にいはせるならば、世に淫祠の親玉と排斥される天理教の開山大和のおみき婆さんとても、仔細に觀察したならば、其の内に偉大なる人格を見出し得るであらう。況して黒住井上金光等に於て、畏敬すべく尊重すべきもの許多あるべきは言ふまでもない沙汰である。能く其の真相を調査して之を世に紹介するは、言論を以て世に立つものゝ天職ではなからうか。吾等は世の食はず

○教祖の人格

○ 教祖の人格  
嫌ひの人々に是だけの注文をするが強ち無理でなからうと思ふ。

### 神に對する觀念

上

金光教は  
普通神道  
以外の機  
軸を出す

凡そ宗教とは神と人との關係を取極めるものである。たまには無神主義の上に立つて居る大乘佛教のやうなものもなくはないが、是は寧ろ例外に屬すべきもので、基督教でも回教でも火教でも祖先教でも、乃至野蠻人の動植物崇拜でも、信仰の對象として神を立てぬものがない。而して其の宗旨の立て方に依つて神にも段々種類があり、又理論の立て方に依つて、宇宙の森羅萬象を神の發現と認める萬有神教もあれば、森羅萬象の第一原因を神に歸着する一神教もある。金光教の現在は祖先崇拜の神道部内に編入せられあるも、其實をいへば、普通神道以外別に一頭角を抽出し、絶對唯一の大神靈を認め、之を『天地金の神』と宣傳するのであるから、勿論祖先教

○ 神に對する觀念

○神に對する觀念  
の範圍を超越して宇宙神教の部屬に編入すべきものである。  
天地金の神とは、名を聞いたばかりでは頗る俗惡の感を起さしめる  
傾向を有つて居るが、名は必ずしも實の實にあらず、佐藤氏の講明  
する所に依れば、

天は幽にして地は顯なり、一切萬有は顯幽相合し相應じて現はれ  
たるものにして、此の顯幽は猶物の二方面の如く、遂に本體に歸  
一す。名づくべからず、語るべからず、不可思議の本體は是れ神  
にして、我が教祖は此の神に接し、之を天地金乃神と宣傳せられ  
たり。

此の説に因るときは天地とは猶有形無形といふが如く、宇宙大理法  
の根源、一切萬有の本體が即ち神といふのであるから、此の點から  
いへば萬有神教といはねばならぬ。  
金光教祖の遺訓なる「信心の心得」にも

神は聲もなし形も見えず、疑はざる限りなし。

といふ一箇條がある。

又「道教の大綱」には

神は晝夜も遠きも近きも問はざるものぞ、信賴心に隔なく祈れ。

清き所も穢き所も隔なく天地の神は御守り在るぞ。

大地の内にて金の神の大徳に洩るゝ處はなき事ぞ。

等の言葉があつて、神の遍在性を説明してある。而して此の絶對實

在の妙智力大功徳は直ちに天地の生々化々に現はれ、玄妙不可思議、

人智の得て測る所でない。

天地の事は人の眼をもて知りて知り難きものぞ恐るべし。

と説いて居る。

されど信仰の對象としての神は、只絶對なり無限なり普遍なり實在  
なりといふが如き、哲學じみた抽象ばかりでは、如何にしても人心

○神に對する觀念



○神に對する觀念

に満足を與ふることができぬ。耶蘇教の神が兎もすれば人格的性情を現はすと同じく金光教の神も亦「道教の大綱」に、

天にまかせ、地にすがれよ。

食物は皆人の命の爲に、天地の神の造り與へ給ふものぞ。

神信心して靈驗の顯を不思議とはいふまじきものぞ。

信心して靈驗のなき時は是ぞ不思議なる事ぞ。

と教へ、「眞道の心得」の開卷第一には、

神國の人に生れて、神と皇上との大恩を知らぬ事。

を戒め、所謂絶對實在が單に冷かなる理法原則の變名ではなく、大

慈大悲の大光明の裡に、可憐の生民を攝取する恩愛の神なることを

示して居る。此の點から觀察するときは金光教の神は基督教のゴッ

トとやふ類似して居るといはねばならぬ。

中

若し狗の社會にして神あらしめば、其の形は必ず狗ならんと、或る人のいつたのは眞理である。人類の上に照臨したまふ神は人格を備

へさせたまふものならではかなはぬ。但しこゝに人格といふは、種

々の偶像のやうに、人間に類似した形を有つて居るといふことでは

ない。主として精靈上についてのこと、神は實に神たるの靈妙不

可思議以外に、人間の最高理想たる人格を有したまふといふことで

ある。

既に神が人間の最高理想たる人格を備へさせたまふとする以上は、

正義を愛し非道を憎むといふ念慮もなければならず、従つて人間の

行爲に關し其の善惡に應じて賞罰禍福を下したまふ大自在の最高權

を有たねばならぬ。エホバの神は其の如くである、モハメットの神

○神に對する觀念



下

金光教に  
は神社を  
要せず

金光教の神は其の人類と觸接する部面に於ては、人類の最高理想たる人格を現するも、神其もの本来の性質としては、絶對である、太一である、遍在圓滿である、無始無終である。此の點に於ては日本在來の神（即ち祖先敎の神）と大に其の趣を異にして居るといふことは既に述べた所である。従つて此の神に奉仕するについては神社を設ける必要がないのであるが、『金光教』の傳記に依れば、神職僧侶修驗者は敎祖の敎導資格なきを奇貨とし、荐りに陥れんとするを以て、慶應三年二月神祇伯に請願して金乃神社を創設め、其の神主となりて眞神の道を傳へらる。

と書いてある。是は頗る奇怪のことで、正直に論ずるときは矛盾の醜を免れ得ぬ次第だが、釋迦にも方便あり、實際不完全の社會に居

て、自己の目的を達せんとする場合には、手段を擇ばぬ場合がなきにしもあらずだ、但し目的が善なれば手段は悪でも構はぬといふやうな詭怪な倫理學説は應用するの限りにあらずだが、善にもあらず悪にもあらず、大した支障りのない限りは一時の方便を許さなければならぬ。そこで金光教の金乃神社といふも全く一時の方便と見るがよからう。佐藤教監の『天地の大理』に

金乃神社は決して往古より在りしものにあらず云々。

とある通り、我邦の神名帳には勿論、支那にも印度にも其のやうな神はなさうである、而して金光教の奉ずる天地金の神と同一のものであらうか否やといふに、成る程名前は大に類似して居るが、其の性質に於て自ら差違あるものと見なければならぬ。いはゞ一時の方便のために設けた假物で、其後間もなく有名無實のものとなつたのも亦自然の理であらう。

○神に対する概念

さりながら假ひ一時の假物にもせよ、金乃神社と命名したのは決して偶然でない。前にも屢々述べた通りに、教祖は上智上根ながらも全く無學の人である。此の無學の人が天地の大道理を参究し始めたは、例の俗間に喧傳せられつゝある衆りの神の金神といふものに疑ひを抱いたが動機となつたので、爾後思想のますゝ進歩し、神觀のいよゝ／＼開展せる後までも、宇宙の大神靈、人類の大祖をも依然として金神の名を以て代表せしめたので、畢竟するに最初の信仰對象の名を襲用したまで、教義の上から見れば金の神でも土の神でも水の神でも火の神でも名義の如何に拘らぬ譯である。或る人の説には天地金の神とは、金神から起つたに相違ないけれども、金と『兼』とは音相通するが故に、天地を兼ね主宰するとの意味に通はせたものであるといつてあるが、餘り穿鑿過ぎた説で、教祖には果して其のやうな考があつたかどうか疑はしい。さて神の命名に上述の如

しとするも、苟くも宇宙の大神靈、人類の大祖を呼ぶに單に金の神を以てするは餘りに威嚴なく、餘りに名實相副はざるの遺憾あるを免れない、そこで後來に至り天地の二字を頭に冠せたことゝ信ずる。かゝる例は支那の道教などには澤山あつて老子に太上玄君とかんとか如何にも尊さうな名をつけてある。天地金の神も先づそれであるから見れば大なる誤りがなからう。以上は概略ながらも金光教の神なるものが如何なるものであるを知り得るであらう、然らば此の神と人との關係は如何に。

○神に対する概念

### 神と人との關係

神は宇宙の大原理たると共に大生命たることは前に述べた所である、故に有形無形一切萬有は皆神から出て神に還らなければならぬ。特に人類と神とは特殊の關係を有つて居るから一層親密なものとされてゐる。蓋し金光教に於ける人類の位置を見るに、他の多くの宗教と同じく所謂萬物の靈長とせられてゐる。然しながら祖先の如く人は神の子孫といふのでもなければ、又基督教の如く人は神の特別念入れの製造品とするのでもない。畢竟は人間は宇宙の大神靈から分派した小神靈で、いはゞ本家分家の關係に外ならぬ。而して萬物は人類のために造られたもの——食物は皆人の命のために天地の神の造り與へたまふものぞ（道教の大綱）——と考へられたのである。人類が萬物の靈長たる高尚なる性格を具へて居るのは即ち神性の一分派なり

人は神の分派なり

神は人の大祖なり

部を享けたるに依るもので、例へば世間の大富豪が分家を立てるに其の財産の一部を割與すると同じく、人間は神性の全部を得る能はざるも、其の一部を分與せられたものである。之を人類の側からいへば、吾人の有する小人格は宇宙の大人格から分派したもので、大と小との差別はあるが、もとく一本體に統一せらるべきものである。一旦本家末家と別れても、もとく一つの大海から出て雨となり雪となり露となり、雞水となり大川となると同じく、一時は種々様々に形を易へても、末は終に本の海に歸入する道理で、神人の間には立派な交通の道筋がなければならぬ、此の道筋を金光教に於ては幽顯感通と稱ふるものである。之を金光教祖の遺訓に徴すれば、前にも屢々引用した通り神は我が本體の大祖ぞといはれてゐる。佐藤氏は之を解釋して

○神と人との關係  
天地は大天地にして人は小天地なり、天地は大人格にして人は小人格なり、天地は大神靈にして人は小神靈なり。而して小神靈は神徳に依りて大神靈より出でしものなれば、神は即ち我本體の大祖たるなり。

といつてある。之を一口に平たくいへば人類に賦與せられた靈能は神の一部であるといふことになる。即ち人が其の形骸を親に受けた如く、靈能を神に享けて居る。そこで教祖は信心は親に孝行するも同じ事と教へられたのである。

而して教祖の遺訓に現はれてある『本體』なり言葉は現今哲學者間に使用せられつゝある如く不可知的を指していはれたものであるか、はた單に有形の形骸に對し無形の或ものを指稱したものであるか、今いづれとも判別し惜い、そは見る人聞く人の識見次第に、深淺如

何様にも意見を取られるから、現に進化しつゝ金光教の將來は、恐らくは一層巧みに哲學的の意義を附加して其の内容を深遠にする時機があるだらう。

閑話休題、人類は既に神の一部であると立てた以上は、子孫分家たる人類は大祖たる神の慈愛の光の裡に居らねばならぬ、造次にも顛沛にも、起つにも居るにも、動くにも、眠るにも、神の慈愛の光を離れては一日も生存することができぬ。人が此の廣大無邊の光明の裡に生息しながら一向之に氣つかずに居るのは、恰かも魚の水中に居て、水の重量を感知せぬやうなものである。金光教祖は此の道理を感得する方法として下の如き教を垂れてある。

疑ひを離れて廣き眞の大道を開き見よ、我身は神徳の中に活されてあり

○神と人との關係

是が金光教に於ける見神の道である。即ち顯幽感通に達する道筋で

○神と人との關係  
ある。而して此の境遇に進まんに信仰と修行との二個の方法に依らなければならぬ。  
要するに神は冷然たる大原理たると共に、活潑々たる大生命である、此の大生命は人間なる小生命あるがために、大慈大悲の光明を垂れたまひ、人間は此の太祖に向ふがために、向上的靈能を發揮し、こゝに神人相互の間の交通路が廓然として開かれることとなるといふが金光教の立方である。

## 信仰と修行

金光教祖の教にいふ、

信仰とは  
死生窮通  
を神に托  
するのい  
ひなり

太陽の照らん極み、神は遍く靈鑑したまふ。天地金の神は天地をかね主宰す神なり、神は平等に慈恩を垂れたまへども、受器悪くば慈恵漏れん。凡て神の御徳を受くるには儘といふ心になれ、儘とは死ぬともまよふことなり（佐藤文華士所輯）  
死生窮通をまよふことなしの廻り合はせとあきらめる位のことには誰にでもできる業なるも、神の慈恵を受けんがために、全く己を空うまて身心二つながら神に捧げるといふことはなかくの難事、眞の信仰（金光教の言葉でいへば信心）とは決して口でいふほど容易

○信仰と修行

信仰は自  
心の靈鏡  
を研ぐに  
外ならず

○信仰と修行

のものでない。蓋し信仰は神人交通の門であるが、人間社會の側からいへば神の靈光を受くべき自己の心鏡を研ぎ磨くといふことになる。如何に神の靈光が赫々として吾人の頭の上に耀き渡つても、之を感受する吾人の心の鏡が塵埃にまみれて居ては何等の反應をも起さぬ。そこで金光教祖は

信心は本心の玉を研ぐものぞやと教へられた。然しながら人が此の猷身的の信仰心を起すには先づ己の心を空うするの必要がある。基督も「心の貧しき者は福ひなり、天國は其人の有なればなり」といはれた如く、豫め蓄ふる所のものを一切掃き出した後でなければ、神の靈光に浴することができぬ。按ずるに人は其の遺傳に依り其の教育に因り其の境遇に依り心中に蓄ふる一種の我見的宗教があるものである。或る一部の人は我は無

我執を除  
かざれば  
神を見る  
能はず

○信仰と修行

宗教である、無神論者であると主張するが間々聞きもし見もするが、かゝる人々の心中にはやはり無宗教無神論といふ一種の我見的宗教を固持して居るので、此の人々に向つて信仰を起さしめること不可能なると同じく、淫祠邪教乃至其他の宗教に固着するものに、神の靈驗を説いて聞かせたところが先づダメといはねばならぬ。これは神の靈光の届かぬ次第ではなく、其の靈光を受ける器が悪いのである。畢竟するに信仰といふことは疑惑の反對で疑惑を除かざれば信仰が現はれぬ、之を金光教祖の教に徴すれば、  
眞の道に入れば第一に心の疑の雲を拂へよ  
といふのである。即ち我執の雲を排し盡して、而して後に大空に澄める寶相の月を見るを得といふ意味で、此の點に於ては世界いづれの宗教も皆其の軌道を一にしてある。  
叩けよ、さらば開かれん(基督)信仰の門一たび開かれれば神の榮光



神の榮光  
は我が頭  
上に在り

○信仰と修行

は直ちに吾人の頭上に來らん。金光教祖はいふ  
眞に難有と思ふ心は直に靈験の始なり

と。此の榮光に浴して歡善怡悦の心を生じ來らば、造次にも顛沛に  
も信仰を離るることなく

やれ痛やといふ心で難有し、今靈験をといふ心になれよ

と教へられたる如く、人事百端皆神の攝理に歸するを得し、生死  
巖頭に立ちても從容として神徳を念じ得るの境涯に達するので、是  
が即ち「死ぬともまよと」いふのである。西行法師が伊勢の大廟に  
參詣またときの歌に、

何事のおはしますかは知らねども只たふとさに涙こぼるゝ

といふのがある、これが信仰の極點で、信仰は其處まで行かなけれ  
ば眞に神に接近することができぬ。

修行に伴  
はざる信  
仰は迷信  
に陥る

二

信仰は神徳を感受するの門戸であることは上述の通りであるが、一  
も信仰、二も信仰で、信仰一點張りの馬車馬主義は動もすれば人を  
迷信に導くものである。我邦に於ける淨土門の佛教が衆さん婆さん  
をして口の先の念佛行者たらしむるの力はあるやうなものゝ、日常  
行爲の上に大なる感化を興ふる能はざるは、一向專念に南無阿彌陀  
佛の名號を唱へさへすれば、それで極樂往生ができるといふ根本主  
義に誤謬の點が潜みあるから起るのであらうと思ふ。勿論卑近易行  
を旨として萬人に通ずる宗派を建立するには聖道門のやうな無暗に  
高尚な、無暗に難解な、云ふ所の無孔の鐵槌を投げ出したやうな遺  
り方では、到底弘通の見込もなからうが、こゝは一番調理鹽梅が必  
要な所である。金光教祖は一面に信仰を勸奨すると同時に一面に修

○信仰と修行

行といふことを説き示し、自力他力の中庸を取ること、に腐心された跡が見ゆる『信心の心得』に

我情我欲  
を擺脫せ

我情我慾を放れて眞の道を知れよ

とある。此の我情我慾を放れるとは煩惱迷妄等、心にかゝる塵を掃ひ清め、所謂『本心の玉』を研き、神より賦與せられた本来の清淨無垢に返つて、眞の道（即ち天地の大理といへるもの）を參究せよといふことで、上に挙げた『眞の道に入れば第一に心の疑の雲を拂へよ』といへると同一の意味である。さて如何にして我情我慾を離れ、本来の清淨心に返り得べきかといふに、金光教祖は

肉體を置  
きて心眼  
を開け

眞の道を行く人は肉眼を置いて心眼を開けよ

と示してある。茲に肉眼といへるは必ずしも眼識の一つを指したものでない、觸法香味に對する耳感觸感鼻感舌感をも合せていつたものと解釋するが至當であらう。元來人は五官に受くる感覺をのみ重

んするの弊があつて、科學者などが盛に經驗を主張し、經驗以外の事物は皆虚偽であるといふやうな陋隘な議論を立てるのであるが、さて五官の領分は何處までの區域で、五官の働きは那の邊まで届くかといふに、此の無際無邊の宇宙間に於て、吾人の五感の覺知し得る範圍は極小極微、全くいふに足らぬ部分に限るのであるから、單に經驗のみを重するときは萬物の靈といふ人間の智慧も、眞に早や御話にならぬ耻かしい次第のものぢや。然しながら吾人の本體は之を神より得、人間は神の一部分と見る以上は、何處にか絶對無限に接觸する所のものがなければならぬ。他の諸宗教殊に佛教などの唯心宗に在つては、『萬法唯一心』で一切の森羅萬象を一個の心の中に持つて來るのであるが、金光教に於ては其處までは擴げてはいはぬが、心眼即ち心識に依つて絶對界に眼を開くを得と立てたのである。佐藤教監の解には、

○信仰と修行

心眼一たび開けなば神の常に我にあるを見ん。教祖が「神は晝夜も遠きも近きも問はざるものぞ、信頼心に隔なく祈れ」と教へられたるは此故なり

といつてある、吾等は此の心眼論に對し多少開展の餘裕あるを信するけれども、現在の教理は蓋し此の如きに止まるだらう。

三

然しながら心眼を開いて宇宙の眞理を洞觀するといふことは幾年幾拾年の修養を積んだ後のことで、凡夫凡婦が一足飛びに其の境涯に達し得らるゝものでない。さらばどういふ方法に依つて修養を爲すべきかといふに、金光教祖は

表行と心行

表行よりは心行をせよ

と指し示された。これが金光教にては唯一の修養方法として珍重す

表行とは何ぞや

るのである。

表行は「わぎやう」と讀む習慣であるさうなが、「わ」は輪にて外側といふ意義を現はし、外部の形式に依り座作進退を律し、若くは難行苦行等に依りて身體精神を鍛錬することをいふのである。儒教では經禮三百、緯儀三千といひ、鹽梅洒掃の小事からそれく、方式を定めて、一定の摸型の内に動作を習はせ、佛教でも朝に起きて夜半に寝るまでの間に嚴重なまかも細密な規則が制定せられてある、殊に小乗部になると例の難行苦行といふものがあつて、中には随分馬鹿々々しい眞似をするものがある。印度の婆羅門教では頭を下にし足を上にして手で歩行とか、何百日の間、木の股にぶら下つて居るとか、恐にもつかぬことをやつて居るものもある。耶蘇教の或る一派でも一生肉食を絶ち、毎日時間を定めて無言の行をするといふやうなものもある。日本でも修行者といふ側には婆羅門風の難行苦行が傳は

○信仰と修行

○信仰と修行

つて、木食上人とか何とかいふものがあり、寒中に水垢離を取つたり、深山に籠つて禪定を修めたり、随分いろ／＼の修行法がある。又俗間にも蓋断ち火断ちなどいふことは今でも汎く行はれて居る。此等に限らず凡そ外部より身體精神に壓迫を加へて、情慾を制限して規律に慣れしめ、所謂習ひ性と化せしむるの方法は何國にもあることで恰かも桶に糞をかけて外部から締めつけるやうな趣があるので、之を『わぎやう』と唱へたのであらう。これも固より修行の一方に相違ない、古來此の方法に依つて徳を成就した賢哲も決して少くないのであるが、元來修行の本旨を『心の玉』を研ぐに在りとする以上は、此の如き迂遠な方法を取らずとも、短刀直入に精神其のものに向つて鍛錬を加へるの手段に依るが最良の方法ではあるまいか。これを金光教では心行といふので、教祖自身が其の模範を示し三拾餘年間六疊一間に閑居して一切の行を心中に成就した

心行とは  
何ぞや

と傳へられてある。

此の心行の方法については追々後に觀察を向けるつもりであるが、一口にいへば禪家に於ける坐禪と酷似して居る點があると思ふ、禪家の主張に依れば、佛心宗は單傳心印不立文字、見性成佛で、言語に據らず、文字を假らず、難行苦行等は固より排斥し、只内觀の法を以て一跳して直ちに如來藏の秘鑰を握らうとするのであるから、此の上なく直截簡明なるものと知られてある。金光教の心行といふは多少の相違はあるとしても先づ一種の禪觀と見て差支へなからう。此の點も將來大なる發展を見る餘地を存することであるが、憾むらくは教祖の修行方法については是まで世間に知られあることは極めて少ない、直門者が若し眼識を具出して居るならば、今の内に顧みて教祖が平常の行事を詳細に拾收して後世に残すの必要があると思ふ。零々碎々たる片言隻句を骨折つて集めるより、どの位後昆を利

○信仰と修行

○信仰と修行  
益するか、宜しく考ふべきことである。

#### 四

分け上る麓の道はかはれども同じ高峰の月を見しかな」といへる如く、方法手段を異にするも終局に於て一致することは世に多い例である。表行といひ心行といふも畢竟東口から上ると西口から上るとの差異で、頂上に達した後は同一地點に立つのである。佐藤氏の解にも左の如くいつてある、

抑も表行と心行とは其の方向順序を異にすと雖ども、其の目的は一なるのみならず、表行は絶對に心を離れ、形より心に向ふものにあらず、或る範圍は心行を含むものとす、されば表行も或る點に達せば心行に合す。  
之を反對の側から觀れば、心行も亦絶對に形を離れ得るものにあら

表行と心  
行との關  
係

表行を排  
する一理  
由

すと言ひ得ることは勿論である。如何に精神の修行なればとて、禮儀作法、一切の形式を排除するやうな亂暴至極な修行方は世にあるまじきことで、或る程度までは是非とも形式を守らなければならぬのは當然のことであらう。要するに表行といひ心行といふも程度の區別で、是から右は表行、是から左は心行と一定の標準線に依つて區別を立てることは不可能である。故に金光教祖が「表行よりは心行をせよ」と教へられたのも絶對に表行を排斥するの意味ではない。凡そ修行の方法は表行心行の二つと分れて居るが、心行を主として精神を鍛錬すべしとの意義であるを見るが至當であらう。金光教に於て表行よりも心行を主とするは直截に本心の玉を研く主義たることは前にも述べた所であるが、更に他面より觀察するときは身體の健全を重んずるといふことも一つの理由となつて居る。

『信心の心得』に

○信仰と修行

體の丈夫を願へ

體を作れ、何事も體が本なり

等の教を殘され、又『道教の大綱』には

我身は我身ならず、皆神と皇上との身と思ひ知れよ

と戒められ、人間の身體は自己のものにして自己のものにあらず、

譬へば大切の預り物といふべき品であるから、妄りに健康を害する

の舉動をなすは神に對し皇上に對し不孝不忠の罪を犯すものと立て

たので、其の結果として自然の生理に逆ふ難行苦行はいふまでもな

く、摺斷ち火斷ちなどいふ俗間の迷信も甚く排斥を受けねばならぬ。

由來各種の宗教中には難苦の行法が行はれたものであるが、それが

化醇するに従つて次第に消滅するが例である。例へば基督教に於け

る新教、本邦佛教に於ける眞宗などが其の著しいものである。吾等

は一切の虚禮虚儀を否認したルーテルや、肉食妻帯を實行した親鸞

金光教は  
常識的な  
り

信仰と修  
行との關  
係

の見識を畏敬すると同時に、金光教祖の見地の凡ならざるを看得するものである。勿論かうなければ二十世紀の宗教として存在する價值もなからうが、一體金光教が他の宗派に比して比較上常識的に出來上つて居るのが吾等が賛成する所である。

五

信仰と修行とは一體両面である。信仰のない修行は資本のない商業の如く、手を廣げれば廣げるほど苦みが増して來て、年末計算をして見ると全く骨折損の儲れ儲となると同様に、何程もがいて修行を積んだところが宗教上の安心立命は到底得られない。而して修行のない信仰は花瓶の生花のやうなもので、一時は水も揚げよう花も咲かう、然し根のないものは永續のできる筈なく、何時しか萎み枯れて了ふはいふまでもない沙汰で、世には當面の煩悶苦痛を免かれる

如何にし  
て信仰の  
永続を得  
べき

○信仰と修行

ために、俄細工の胡座を組んで見たり、口の先ばかりのアーメンや念佛を唱へるものも聞かある例なるが、根が姑息の信仰で、大切な修行を缺いて居るために、いつとなくぐらくと動き出して、昔に變らぬ木工阿彌に返るもの、吾等が可厭となるほど見聞する所ろで「洋や今日は向ふの岸に咲く」憐むべき煩惱亡者は生死海中に漂うて、終生解脱の機に接し得ぬ、真に以て氣の毒千萬なものである。之に反して彼の目に一丁字なき真鍋平九郎が奮然として志を立て、千里の波濤を越えて宋國に入り、逕山に上つて修禪十三年、脛肉の腐るまで、精進力行して、遂に轉迷開悟の妙域に達し、著名なる松島瑞巖寺の開山となつた事蹟などは吾等が矜式すべきものであらう。さりながら吾等凡夫の悲しさは一旦信仰心を起し、一身を修行に委ねて見ても、兎角に其の功德の現はれざるもどかしさに、折角崩した菩提の芽を二葉とならぬ先に枯らして了ふやうなことは聞かある

習ひで、如何にも残念至極の事といはねばならぬ。そこで金光教祖は下の如き垂示を残されてある。

信心は容易が如くして容易らず。三年五年の信仰にては尙ほ迷ひ易し。十年持續は信神家といふことを得ん。日は歲月の始元なれば、其日其日の御蔭を蒙りなば、幾拾年幾百年も淪らざるべし。今月今日で頼め、御蔭は我心にあり、取り越したる苦惱すべからず。(佐藤文學士所輯)

強固なる信仰、不退轉の精進は全幅の努力を要すこと勿論であるが、其の日々の靈驗を感得して、幾分なりとも神の光明に浴するを得れば、精神は常に鼓舞作興せられて、日に日に新なるを覺ゆるであらう。此の垂教は特信家に取つて全く天來の福音と稱すべきものである。殊に後段は「道教の大綱」第一に

○信仰と修行

今月今日で一心に頼め、おかげは我が心に在り。

○信仰と修行

といふを一層に親切詳明に説かれたもので仔細に味はふときは妙味  
津津として齒牙の間に溢れるを感ずる、是れ基督がいはゆる

明日の事を思ひ煩ふなかれ、今日の事は今日にて足れり。

この訓言と全然符節を合するもので、眞人の頭腦は十方三世に亘つて共通のものであるといふことを今更に尊く思はれるのである。こゝに餘計な事ながら一言附記し置くの止むべからざるは、世に靈験といひ、おかげといへば直ちに一種の奇蹟を想像する傾向を有つて居るが、天樂空に響いて五雲たなびいたとか、エホバが火雲の中に現はれて歴西に話をしたとかいふやうな昔話は今の世に有り得べからざる神話で、萬一そんな有形的の靈験があつてはそれこそ大變、神も糸瓜もあつたものでない。畢竟靈験とは各人に感得する心理的狀態を指すもので、言語文字で説き明すべきものでない、是が金光教祖が『おかげは我が心に在り』と示された理由である。世の愚昧

なる教師などが此の飛示を深く考へずに、動もすれば有形の靈験を心に描くので、破迷の教が却て迷信を鼓吹するやうな馬鹿なことになるのである。

○信仰と修行



# 顯幽感通

上

顯幽感通は金光教に於ける極意で、教祖が三拾餘年の心行に依つて自在に神と交通せる心理的狀態をいふのであるが、一般信徒に於ても眞正の信仰と眞正の修行とを積めば、此の境涯に到達すること勿論できるものと立てゝある。

顯とは一切の有形事物をいひ、幽とは一切の無形事物をいひ、現に生を此の世界に受け居る我々人間の形體は顯界に屬するものなるも、形體中に存在する精神は宇宙の大神靈から分派したものであるから、智徳圓滿の域に上り、一點の曇りなき心眼を開き來れば、自ら幽界に入入して宇宙の大神靈と交通するを得、現に教祖は此の無上智徳を完全に成就されたものとしてある。之を現今普通の言葉でいへば、

有限より  
無窮に入

神祕は宗  
教の本也  
なり

吾等の精神は其の修養如何に依つて、相對有限の世界を超越して、絶對に接觸し得るといふので、こは既に常識の範疇を出て、神祕の領分に突入して居るから、何人にも合點の行くやう解釋を下すことは至難である。要は各自の心に迎へて各自に解釋するより外に致し方がない。

吾等は先きに金光教を比較的常識に出來上つて居ると評したが、宗教本來の性質として其の極點を神祕に置かぬことができぬ。否、神祕に置くのが當然で、宗教の宗教たる價值が即ち其處に存するのである。若しさもなければ宗教は一種の倫理學となり、神學と哲學とは區別のないこととなるであらう。

吾人は固より常識を貴ぶ、さりながら吾人の智慮分別は有限中の有限のものである。そはニュートン云つた如く『吾等の智識は濱の眞砂の一粒を拾ふに過ぎず、眞理の大海は眼前に洋々たり』で、此

宗教は不可思議の研究にあらず

○ 顯幽感通

の洋々たる真理の大海は吾等には取りも直さず神祕として現はれるのである。世の哲學といひ科學といふは此の未發の真理を開拓し、所謂不可思議、不思議の領域の領分を縮小せんと企てつゝあるものであるが、何分にも有限の人智の悲しさ、全部の目的を達することは先以て不可能と見なければならぬ。従つて神祕の暗黒界は何時になつても智識の前面に横はつて居る。此の智識分別の力の及びかねる部分が即ち宗教の領域に屬するのである。されば徹頭徹尾智識を基礎とする哲學でさへ、其ごんづまりに行くといふ一種の信仰（信仰とは人類が不可思議に對する態度である）に歸せざるを得ない、況して經驗一點張りで、智識の區域を更に縮小した科學となると、暗黒界はますます擴大して自己の領分はいよゝゝ狭くなるは事實である。竟畢は宗教は哲學科學の未知數に對する信仰を意味するものであるが、研究を意味するものでない。かう兩者を區分して見ると其の間に何

金光教は神祕の間口を狭小にする

○ 顯幽感通

等の衝突も起る筈がないのであるが、世の宗教家が動もすれば哲學科學に對して戦を挑むの態度に出るのは奇怪といはねばならぬ。二十世紀の宗教として哲學科學と始終衝突するやうな立教の主旨の間違つて居るものは到底存続し得るものでない。そこで金光教は果して如何と見るに天地の事は人の眼をもて知りて知り難きものぞといはれて、小さな智識分別で、我は顔に振舞ふことを戒められてあるが、教義の根底は全く智識思慮の領分を離れ、信仰に依れる神人交通の上に立てゝあるので、科學哲學とは全然方面を異にして居る。勿論進歩せる基督教や佛教や、いづれもそれに相違ないのであるが、其の成立が輒近に在つて、殊に當今の文明に觸れてあるだけ神祕の間口（奥行は暫く置き）を成るべく狭め、此の顯幽感通を除くの外、大部分を常識の範圍に納れてあるのは最も注目すべきもの

信仰修行  
の功徳に  
依り佛果  
を成す

○顯幽感通  
であらうと考へる。

中

佛敎の或る派に於ては摩訶般若波羅密多を行すれば阿耨多羅三藐三菩提を成ずるといふことを教へる。言葉が梵語だけに陳紛淡の間に何やら難有味があるやうにも聞けるが、日本語でいつて見れば摩訶とは形容詞で普通に「大」と譯するものであるが、詳しくいへば其の外延に於て大、其の内容に於て多（豊富の意）、其の實質に於て勝（優等の意）の三義を含んで居るさうである。般若とは普通に智慧と譯する言葉であるが俗間にいふ猿智慧などをいふではなく、玲瓏々として一點の曇りなき妙寶珠をさすので、王陽明が所謂良知といつたやうなもので、金光敎の本心の玉と全く同じ意義になるのである。波羅密多とは到彼岸といふことで、生死流轉、六塵煩惱の

人間は神  
と共に居  
るを得べ  
し

此岸から涅槃の河を渡つて寂光淨土の彼岸に着くといふので、言ひ換へれば相對界から一躍して絶對界に入るといふ意味である。阿耨多羅三藐三菩提とは無上正道の義で、之を成ずるとは取りも直さず佛果を得るといふことになる。以上を約めていへば即身成佛で、佛界といつても自己を離れて別に存在するのでもなければ、自己の修行と自己の信仰とに依つて、即心淨土、己心彌陀を見出すといふに過ぎぬ。此の立て方は例の佛敎の唯心主義を基礎としてあるから、稍萬有神敎的の臭味ある金光敎も全然符合することはもとよりない、然しながら前にも屢擧げた「本心の珠を磨き、心眼を開いて眞の道を見る」といふ金光敎の敎旨と略其の歸趣を一にすることは容易に見得る所である。

基督は常に其の使徒に向つて「吾は父（神を指す）と共に居る、爾曹吾を見るは即ち父を見るなり」と教へられた。當時基督の足下に

○顯幽感通

○顯幽感通

膜拜せる幾拾百の信徒中に、肉の耶穌ならざる眞の基督を見たるもの果して幾人ありしやは吾等が知らざる所なるも、中には所謂心の清きもの、心の貧しきものが、基督に依つて自己の天國を開拓し、自己の心眼を開いて神を見たり聖者の存するあるはいふまでもないことである。基督の如く絶對實在を外に立て居る宗派でも、亦相對有限の境に居ながらも絶對の一端に接觸し得ることを認めてある。況して萬有神教の立脚地に立てる他の教派にして神人の交通を是認するは議論のない所であらう。

近世倫理學では頻りに自我擴張といふことを唱へて居る。此の自我といふ言葉は吾等が屢使用した『小我』といふのと其の範圍を同にするもので、宇宙に對するときは小我となり、外界に對するときは自我となるだけの差である。倫理學の所謂自我擴張が宗教的の意味を有つて居らぬことは勿論であるが、見方に依つては自我を擴張す

るといふことは大我の一部を充たすの意味であるといひ得るは無論である。されば全然常識の範圍に屬すべき倫理學すら、其の極端を叩けば絶對の一部に接觸することを認めて居るといつて差支ない。

要するに人間の要求は到底常識の經驗のといふ小さな區域内に局限して、それで満足し得るものでない、必ずや其の理想の一端には絶對無限の眞如法性を捉へようとする、而して宗教は即ち此の要求を充たすがために、人類の歴史と共に存在する一現象、一事實であるからには、金光教に於ける顯幽感通も獨り宗教としての極致といふばかりでなく、人生必須の條件と見るが適當であらう。

下

人間は主宰の神の所造物で、其の始祖の原罪に依り、現在の如く苦想不如意の境遇に墮落したものであるか、はた人間は自然の生物の

○ 顯幽感通

一であつて、劣等下級の状態から次第に進化して、現在の如く智徳共に他の生物に優れたものとなり、此後いよ／＼ますます／＼化醇して、終に神とか佛とかいふやうな高等の物になるべき運命を有つて居るものが、甲は基督教の教ふるところで、乙は進化論の唱ふるところ、凡そ人類の過去現在未來についての議論は此の二個の相反せる主張の衝突に過ぎないのである。そこで金光教の立脚地は如何と見るに、人は神の所造物にあらずして、神の一部であると見るのが此の教の本旨であることは、吾等が既に『神人の關係』に於て述べた通りで、人間を一種の墮落物と認めざるは勿論、必ずしも億萬斯年の後を期せざれば神に還ることを得ぬといふほど不自由なものでもない。随分個人々々の心掛次第に依つては、現世一代に於て神に還り得るの道がある、即ち即身成佛の途は開かれてあると立てたのである。是れは立教の本旨から演繹される當然の歸結である。

金光教は進化論と無相せず

然しながら金光教は進化論の原則を無視し、或は之を拒否する如き無謀大膽を敢てするものでない。佐藤氏の解に依れば

吾人人類の此の世に生れ來れるは母親より出づるものなれども、其の母の胎中に宿れる源に就て、神靈の何れよりか來りて其の本を爲すが如し、此の如くして生々化々の理開く、此の理によりて萬物悉く發生して、天地の間に其の所を保ち、調和ありて圓滿に運轉す。既に天地の間に萬物存在す、茲に又萬物の間に道あり、人には人の道あり、物には物の理あるが如し。且つ生々化々の理は是れ進化發達の源にして、萬物は各自の道に従ひつゝ、又時々刻々に此の理に引かれて進歩發達す。然らば此等進化の究極する所は如何、萬物の進化發達は天地の大理の進化發展にして、天地の大理は即ち我神の神性なり。故に究極は神に還らざるを得ず。とある。即ち進化は神の意志で、又宇宙の大法たるを認めて居る。

○ 顯幽感通

故に人間は其の信仰と修行とに依つて即身成佛を得るとしても、それは精神界に於ける一部の進化を意味するもので、全體の進化は進化論の原則に依らねばならぬことは無論である。蓋し金光教に於ては顯幽二界を立て、顯界を以て物理學的法則に従ふものとせざるも、幽界に至つては一に神の支配に歸するものにして、人力の思議すべき限にあらざると定めあるが故に、幽界の一部に屬する人間の精神は必ずしも顯界の規則に拘束せらるゝことなく、時に神祕の働きを爲し得といふことは、論理の許容する所であらう。

此の理に依つて吾人の精神は直ちに神の一部に觸れ（寧ろ神に還り）現世に於ける向上の頂點に達し、吾人が四六時中渴望して止まざる要求に向つて満足を與ふるのであるが、之がために科學上の研究と相衝突して無用の戦端を開くの患は曾てなきのみならず、顯界に屬する部分については却て科學の研究に依つて大に教理の發展に資給

するであらう。

宗教の要  
は倫常に  
随す

金光教は  
常識的倫  
理を採用  
す

○人の本務

# 人の本務

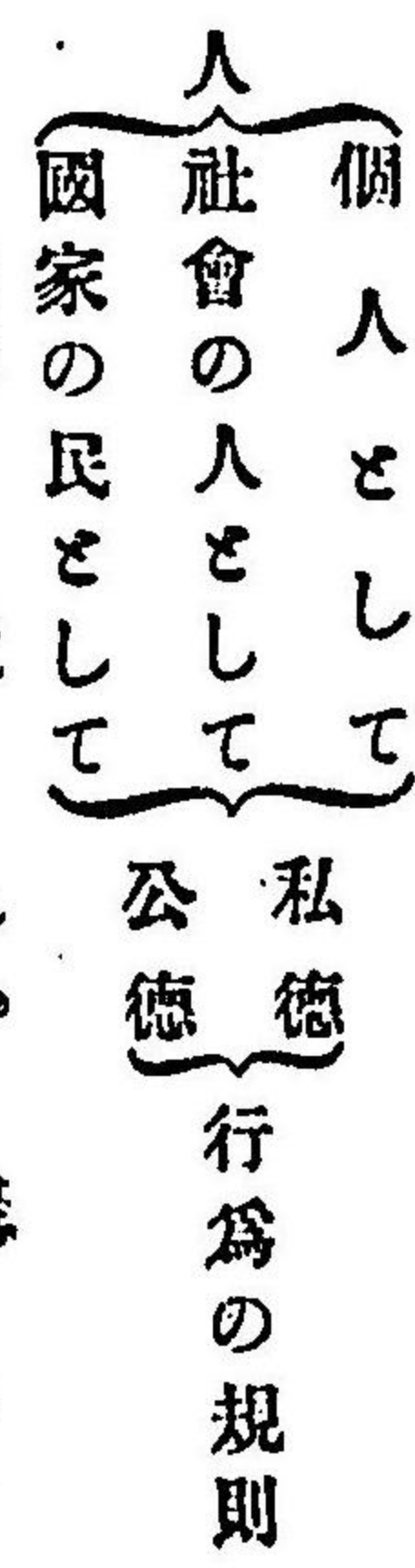
釋尊一代の説教、五時八教、八萬四千の法門も、要は『諸惡莫作、衆善奉行』の二句に約入すべしと聞く。畢竟諸宗教に於て、宇宙を説き、十界三世を説き、因果應報を説き、見神見性を説き、天國を説き、地獄を説き、神の審判を説き、六道輪廻を説き、天啓默示を説き、頓生菩提を説き、乃至、命運を説き、禁呪を説き、祈禱祝福を説くも、歸する所は人間をして正當の道筋を歩み、荆棘の邪路に陥らざらしむるの用意に過ぎぬのである。金光教祖三拾餘年間の修行説教も、人間の歸向心を一にし、禍惡の種を一掃せんとするの菩薩業であることはいふまでもない。さらば金光教にては人の本務を如何に定めてあるかといふに、吾等が先にいへる、常識教の面目

人は三つ  
の異りた  
る方面を  
有す

○人の本務

は最も遺憾なく此の部に發揮されて居る。大凡そいづれの宗教にても人の現世の行事に對する規則は大同小異で、何方に向いて見ても親類同志に近いものであるが、金光教に於ては殊に一般普通の倫理習慣を採用して居る。例へば儒教に於ける五倫五常の道とか、佛敎に於ける十善十戒とかいふやうなものは、凡べて障壁を設けずして歡迎せられてある。で、詳に此等の規則に就て觀察するとき、殆んど教科書用の倫理書を講釋するやうなところなるが故に、吾等は成るべく煩しさを避け、他の宗門と稍々面目を異にする、言葉を換へていへば金光教の特有ともいふべき二三の行為の規則に就て其の梗概を觀察しようと思ふ。娑婆世界に於ける人間は三個の異りたる方面より見ることが出来る。即ち個體としての人(一)社會の一員としての人(二)國家の臣民としての人(三)是である。而して人は其の傾く方面を異にするに従つて、

○人の本務  
行為の規則にも自ら殊別を要する。例へば個人としての人は、自己の生命を重んずべきは勿論なるも、社会の一人としては、時に身を殺して仁を成すの必要もあるべく、国家の臣民としては、義を泰山の重に比し、命を鴻毛の軽きに置くの場合もあるであらう。此れは是れ極端の例であるが、世事往々之に類すること少くない。所謂公德と私徳との差別の如きも、即ち此の異りたる方面に働くところの徳義を主観的に見た名目である。餘り必要な事ながら序に之を圖解すれば左の如くである。



而して『中庸』に道とは須臾も離るべからざるものなり、離るべきは道にあらずといへる如く、人間行為の規則は隨意科目にあらずし

て必修科目であるといふことを忘れてはならぬ。倫理學にいふ人間道念の總量たる人格を仕揚げるについては、殊更大なる注意を要するは勿論である。そこで金光教に於ては如何なる法則の下に人格仕揚げの方法を講じつゝあるか、以下前舉の三區別につき概述を試みることにする。

二

個人としての人の務は、身體に對するものと、精神に對するものと二つに區別されてある。「信心の心得」に體を作れ、何事も體が本なり。とあるは身體に對するの教訓である。「孝經」に身體髮膚、之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なりといへる如く、吾等は宇宙の大神靈に依りて生を此の世に受けたる以上は、自己の本務は他まで

○人の本務



○人の本務

蓋さなければならぬ。其の本務を盡すには身體の健全が土臺とならなければならぬ、即ち「何事も體が本」である。然るに宗派の或るものに在つては身體を粗末に取扱ふを以て本色として居るが間々あるやうである。前にも曾て言つた如く幾多の難行苦行を経て、初めて佛道に入ることができると立てよある佛敎の一派や、基督敎の舊敎に屬する禁欲主義を奉ずる一派の如きはそれである。勿論それも修行の一方方法たるに相違ない、釋尊が雪山に於ける、モハメットが洞穴に蟄居せる、いづれも立派な証據を残されてある。然しながら此の例を以て一般普通に強うるは蓋し誤謬といはねばならぬ。何となれば心は身を離れて存在し得ざるのみならず、近時の研究に依れば心とは畢竟身體の生活に伴ふ機械的作用に近く、健康の精神は健康の身體に宿るといふ格言はます／＼價値を現するとせられたほどであるから、如何に心の修養に重きを置けばとて、身體を無視する

日本の宗  
教の特色

の亂暴至極なることは吾等がいふまでもない、佛耶兩敎に残存してある斷食などいふことは悉くは金光敎に於て拒否するところであらう。

そののみならず金光敎祖の訓言に

我身は我身ならず、皆神と皇上との身と思ひ知れよ

とある通り、金光敎に於ては自己の身體を自己の物として、我まゝ勝手に處分するを許さぬ、いはゞ神と君との預り物で、之を保護攝養して、其の健全を保つは一個の義務と考定せられてあるから、自殺毀傷等の故意の行爲は勿論、不用意に起因する怪我も亦疎虞懈怠の罪を免がれ得ぬのである。此點については基督敎と略々歸趣を一にするのであるが、基督敎にては其の原由を單に神の賜を愛護するに歸入するとは大に面目を異にして、特に「皇人」を配してあるのが流石に大日本帝國に興つた宗旨の特色であらう。

○人の本務

○人の本務

精神に對する責務は「信仰と修行」に於て略説き盡してあるから、再びこゝに絮説するの煩を避けるが、金光教祖は心身相關の理を看破して、

吾心で我身を救ひ助けよ。

我心で我身を生かすこともあり、殺すこともあり、

と戒め、更に具體的なるは

食物は我心で毒にも薬にもなるものぞ。

と示されてある。要するに心を正中に置き平和と安泰を得るにあらざれば、滋養物も滋養とならず、却て身を毒するの結果を來たすことを致へられたものである。之を裏面から見れば精神の平和安泰を得て居る者は、粗衣粗食も營養の働きを爲すといふことになる。古來禪僧などが豆腐と粥で生命を繋いで居ながらも頗る長壽の人の多いのは、即ち心中に一點の不安なく、優容不迫の境涯に居るからで

あらう。

三

支那の學者は「人は生れながらにして群を成す者なり」といひ、歐西では「人は社交的動物である」といつてある通り、人間はどうして雌群索居といふことはできぬ性質のものである。そこで一方には個人と個人との相對的關係が起ると共に、他方には「夫婦、室に居るは人の大倫なり」とあつて男女兩性の抱合から親子兄弟等の家族的關係が起つてくる。畢竟人間社會とは個性の關係と血縁の關係とが互に經と緯となり、いろくさまくに文を織り成してでき上つて居るものである。従つて之に對する人間行爲の規則は、個性又は家族を中心として打立てらるべきは必然である。例へば日本の如き家族を單位として萬般の規則を割出す慣習の邦土もあれば、又歐西

○人の本務

○人の本務

各國の如く個性を目安として人間の歴史を描く邦土もある、此の両つものゝ差異について各利害得失が伴うて、單純に甲を是とし乙を非とする理由にもゆかぬ、要するに其の民俗に依て教を設けるより外に致方があるまい。然らば金光教は之に就て如何なる見解を與ふるかといふに、先づ個人的關係の側から觀察すれば、

天が下には他人といふ事はなきものぞ。

と教祖は斷案を下されてある。即ち世界同胞主義を最も簡明直截に言ひ現はしたものである。最も是は人間は宇宙の大神靈大人格（大我）から分派した小神靈小人格（小我）であると定められた教旨の根據から、當然演繹せらるべき論理の歸着であるが、「天が下」と喝破せられた識見は、孔子が「四海の内皆兄弟なり」といふに比して、一層の宏大莊嚴を見るであらう。而して此の一天四海の同胞兄弟に對しては、吾等は如何なる態度を以て交るべきかといふに、金光教

祖は

人の身が大事か、我が身が大事か、人も我も皆人。

と示されてある、之を當今の言葉で言ひ換ふれば、各人は自己の權利を尊重すると共に他人の權利をも尊重しなければならぬ。其處に自主もあれば自由もある道理となる。又「信條」第七條に  
我身の苦難を知りながら、人の身の苦難を知らぬ事

とあつて「正傳」に之を解して

凡そ此の社會は自身一己の爲をのみ思ひて他人の爲を思はざるときは、一日も安寧に過すこと能はず、是の故に愛身愛家の心を以て他人に交るべし  
とある。之を孔子が

己の欲せざる所、之を人に施す勿れ。  
又基督が

○人の本務

○人の本務

己の欲する所、亦之を人に施せ。  
とある東西二大聖が千古不磨の金言に對照するとき、言葉の文は違つても、互に表となり裏となつて、ますく、光輝を揚げるであらう。

更に眼を轉じて家族的關係の規範を見るに、  
縁談に合性を改め見合ふより眞の心を見合へよ

といひ、又

家柄人筋を改めるより互に人情がらを改めよ

といひ、世人の合性の、星の、家系の、容貌のと要なき詮議に力を盡して、肝心の心の詮議を疎にするの迷蒙を打破して婚姻の第一議を確立し、進んで親子の關係に入つて、

子を産むは我力で産むとは思ふな皆大祖神の恵むところぞ。  
といひ、世の愚夫愚婦が、我子を我が所有の物品の如くに心得あら

ぬふるまひするものあるを戒め、

懐妊の時、腹帯をするよりも心に眞の帯をせよ

と、胎教の極めて大切なるを戒めて親の子に對するの責任を定め、  
又子の義務としては、

幼少の時を忘れて親に不孝の事

との「信條」を置き、

神の恵を人知らず、親の心を子知らず。

と概し、更に

神信心のなき人は、親に孝のなきも、人の道を知らぬも、同事ぞや

と孝道の至重なる訓誡を垂れられてある。要するに金光教は個人主義と家族主義とを適當の程度に於て調和せんとの希望を有するもの  
と知るべく、家族主義の弊に厭ける我邦と、個人主義の毒に中てら

○人の本務

○人の本務  
れてある歐西の間に於て、大中至正の道を開くことは後繼者の大責務であらう。

四

余の生れ故郷は出羽の莊内といふ偏僻の地であるが、最上川の沖積層で相應の平野が開けて居る。此の平野が川の南北に依つて頗る地味を異にして種々の現象を見るのであるが、中にも最も著しきは茄子と蘿蔔で、川南では茄子は丸く蘿蔔は長いものときまつて居るが、一衣帯水を渡ると、蘿蔔は丸く茄子は長いものとなる。そこで互に種を交換して栽つて見ても、矢張り其の土地々々の固有の形に化けて了ふ。是れは必ずしも余の郷土に限つたことでなく何處にも例の多くあることで、古い「楚騷」の中にも、「橘、江を越ゆれば化して枳と爲る」と書いてあるから、支那人は三千年の昔に疾に氣がついて居る。實際土地の産物に對する風土の感化は至大の力を有つて居るものである。

て居る。實際土地の産物に對する風土の感化は至大の力を有つて居るものである。宗教も一種の産物である以上は如何に超世的のものでも風土的影響を受けぬわけには往かぬ。然し宗教の田地は無機の土壌ではなく、有機の人心であるからには、所謂風土は其の國の歴史と習慣とを指すものとならねばならぬ。されば佛教には印度固有の思想があり、耶蘇教には小亞細亞傳來の思想あり、回教には亞刺比亞特色の思想があると同じく、日本の宗教には日本の思想を含むべきは當然のことである。特に日本人は古來頗る強盛なる同化力を有し、倫理道德の世間的のものは勿論、出世間的の宗教をも、何時の間にか知らず知らず固有の風俗習慣に同化して了ふ、吾人は其の著しき例として儒佛兩教の傳來以後の變遷を挙げ得るばかりでなく、近來の耶蘇教各派が漸く其の本國教會の羈絆を脱して、自在なる活動を始めると

○人の本務

○人の本務  
共に、次第に日本の特色を帯びて来るのを看取し得るのである。況して日本の國に生れ出た教派に在つては日本固有の色彩に依つて仕揚げられるのは無論であらう。神道諸教派の其の根本を祖先教に置くものはいはすもがな、金光教の如き全く殊別の立場に在るものでも、日本の精神の深乎として犯すべからざるものがある、他なし即ち國家に對する觀念是である。金光教の「信條」を觀るに其の第一

神國の人に生れて神と皇上との大恩を知らぬ事と掲げられてある。こはいふまでもなく神恩君恩の輕重なきを示されたもので、畢竟人は神徳に依つて生れ、君徳（即ち國家の保護）に依つて生存するものである、されば此の兩尊は日月の如く並び懸つて吾等に罔極の恩恵を下したまふが故に、吾等は神徳を感謝すると共に、國家に對する忠愛の念を片時も忘るべからずとの意味であ

る。前にも擧げた我身は我身ならず、皆神と皇上との身と思ひ知れよ。といひ、又信心して壯健で家業を務めよ、君の爲なり、國の爲なり。とある如き、明かに國家に對する義務の觀念を指定して居るのは、恐らくは他の宗教に多く見ざるの例であらう、日本の特色は此の一段に於て最も明白に最も顯著に發揮されて居る。

五

凡そ一國民が其の國に對する忠愛の至説は自國の歴史と名譽とを尊重する崇高の觀念で、決して一朝一夕に造り上げ得べきものでもなければ、又法律其の他の道具を以て強制し得べきものでもない。此の觀念は其の國の歴史と共に先祖代々より子孫傳へて固執相續す

○人の本務

○人の本務

る間に、一種の宗教的信仰と化して、國民個々の脳裡に銘記せられ、拭ふも去るべからず、磨するも消すべからざるに至るものである。例へば大英國といへば英國人には一種の微妙なる感覺を興へ、大日本帝國と唱ふれば吾々日本人の耳には恰かも音樂のやうに響き、祖國の歌、馬耳塞の歌を奏すれば英佛人を感奮せしむる如く、「君か代」の國歌に吾人が肅然として襟を正すのも、畢竟愛國忠君の觀念が宗教的信仰化成して歴然として心裡に存在しあるからである。西行法師の伊勢大廟に謁せる折の歌に「何事のおはしますかは知らねともたゞ尊さに涙こぼるよ」此の境涯は到底理窟や義理で往けるものではない。殊に我が帝國の如く世界列邦に比類なき歴史と國體とを有し、皇室と臣民とは一家本末の情義の離るべからざるものあるの邦國に在つては、他の英佛諸邦とは大に趣を異にし、單純に「愛國」の二字を以ては我が國民の性情をいひ現はし得ず、必ず之に「忠君」の

二字を添へなければならぬ、是が即ち大和魂とも日本武士道とも命名けられ、現に日露戦争以後に於て世界の注視を惹きて研究の對象とせられつゝある國粹である。此の國粹や吾人は他まで保存し、他まで發達せしむる必要があるであらう。吾等は金光教が逸早く普通宗教以外、別に一隻眼を具有せるを多とするものである。

忠君愛國は我が國民のナショナルリテーで、凡そ如何なる宗教、如何なる倫理でも一旦之を此の鑄型に容れて鍛へ直した後は國民は之を受納せぬのである。儒學に於て孟子の久しく擯斥を受けたも之がため、耶穌教徒の或者が聖影奏拜を拒み國賊の名を冠せられたも之がためである。佛耶二教の日本化といふも要するに此の鑄型に依つて鍛へ直さるゝに外ならぬ。金光教は此の國粹を直ちに其の教義に應用し、「信條」第一に置きたるはさすが日本の宗教といはねばならず、之に依つて化成的信仰を一轉して眞誠の宗教的信仰と爲し、

○人の本務

金光教の熱心な輸送に於ては、外國の如く、輸出の如く、輸入の如く、

○人の本務  
永久無窮に此の國粹を保存し、長養するに於て大なる力を得るのみならず、佛耶諸教に於て動もすれば柄鑿相容れざる、血税の義務等に就ても、宗教的に之を遵奉し得るの利益を興へるであらう。然しながら吾人の見解をして全く國家を離れしめ、單に宗教として其の教義を觀察するときには、之がために布教の範圍を限定するの遺憾は免れ得ざるべきを信ず。何となれば支那人猶太人乃至歐米各國の個人主義の盛に行はれ、且つ其の國にして屢々革命若くは興亡を閱したる歴史を有するものに向つては、到底此の教義の妙を會得せしめ得ざるのみならず、熱帯極暑住民に團扇の使用を勧むるが如く、實際用を爲さざるがためである。

六

以上個人として、社會の一員として、國家の臣民としての本務を概

倫理思想の要

評した、が金光教の倫理的方面はもとより之につきたわけでない。教祖の遺訓八拾餘條中、其の七八分は人間行為の規則に屬するもので、中にも「眞道の心得（信條）」と稱する十二箇條は信徒の日常行為に關する訓誡であつて、教理を研究する上に就ては「道教の大綱」「信心の心得」にくらべて裨益を得る所少ないか、信徒の信條としては最も適切なるものである。吾等は金光教に縁なき人々のためにこゝに之を掲げて金光教の倫理思想は果して如何なるものなるやを示すも強ち無用ならざるを信するものである。

- 一、神國の人に生れて、神と皇上との大恩を知らぬ事。
- 一、天の恩を知りて地の恩を知らぬ事。
- 一、幼少の時を忘れて、親に不孝の事。
- 一、眞の道に居ながら、眞の道を履まぬ事。
- 一、口に誠を語りつゝ、心に誠のなき事。

○人の本務



○人の本務

- 一、我身の苦難を知りながら、人の身の苦難を知らぬ事。
- 一、腹立てば、心の鏡のくもる事。
- 一、吾心の角で我身を討つ事。
- 一、人の不行状を見て、我身の不行状になる事。
- 一、物毎に時節を待たず、苦をする事。
- 一、壯健な時、家業を疎にし、物毎に驕る事。
- 一、信心する人の眞の信心なき事。

其の訓誡の一端常識的で、鬼面を被つて小兒を嚇すやうなことの絶えてないのが金光教固有の色彩であらう。

地より剣を出さんが爲めなりと叫びたる基督は果然思想界に激烈な革命を興へたが、金光教祖は徹頭徹尾平和穩實を旨として、祖先教の範圍を躍出しながら、祖先教の醇を酌み、民俗習慣の弊を矯めながら、民俗習慣の粹を保存するに勉めたのである。彼は子をして

其の父に離れしむるを願はず、地に剣を出すを好まず、彼は平等界に頭を突き入れながらも、差別界に還相回向して三拾餘年間の教を説き、恰かも釋尊のその如く大地山河草木國土を差別相其のまゝに悉皆成佛を得せしめんと希望したのである。彼は人間の個性を認め、然しながらそれと同時に社會的群生たるを認め、又有機的團體(國家)の下に生存すべき運命を有するを認め、怨篤にして圓滿なる訓誡を垂れて居る。吾等は此の點に於て金光教信徒が長へに喪家の狗となるの厄境を脱して、國家社會と向上進歩の途を共にすべきを喜ぶものである。

○樂天主義  
樂天主義

上

凡そ宗教には樂天的のものもあれば厭世的のものもある、中には兩者を合併したやうな言はず折衷主義とでも名づくべきものもあるやうだが、世界の二大宗教と唱へられる佛耶二教に就て見るも、耶蘇教は樂天的旨味が深く、佛教は厭世旨義が多い、然しこれもホンの概観で、仔細に吟味したならば、厭世の内にも樂天あり、樂天の内にも厭世を含み、明白な境界標を立てることは勿論困難であらう。佛教の始祖釋迦牟尼は一切衆生が苦病老死の四苦の間に彷徨ひ、六道に流轉するを氣の毒に思ひ、佛道成就の一大發願をなされたことであるから、原始佛教は疑ひもなく厭世主義であつた、其の証據には今でも小乗部では盛んに人世のはかなさを説き、涙の中に人を

教化しようとして勉むるのである。進んで大乘部に至るも全く其の痕迹を脱せず「朝に紅顏を誇るも、夕に化して白骨となる」といふやうな文句は淨土真宗の大徳に依つて唱へられて居るに徴しても、佛教の眞味は或る一派の強辯する如く樂天的のものでないことが分かる。禪門の如き現世的のものとなるも、苦樂といひ、迷悟といひ、衆生と、いひ佛といふが如き相對的のものは、一切西の海にさらりと投げ棄て、一味平等の涅槃妙心を眞向に振りかざし、是心是佛とやつて除けるのであるから、厭世の樂天のといふ詮議は不必要であるけれども、何といつても出が出であるから、ごん底には徹かに厭世の響が残つて居る。そこで或人は大乘佛敎を厭世的樂天主義と呼べるのは或は其の當を得て居るかも知れぬ。耶蘇教は由來樂天主義と見做されて居るが、人類始祖の原罪を説き、神の子の贖罪を説きたる原始教には何處かに厭世の思想が潜んで居るやうに思はれる。

○樂天主義

○樂天主義

此等の横道に走つた詮議立は、どうでもよいとして、眼目の金光教に立歸り、彼は樂天教であるか、はた厭世教であるかと問はれたならば、余は躊躇なく樂天教であると答ふるであらう、その其の教義から出る自然の結果である。何となれば金光教に於ける人類の地位は、前にも屢述べた通りに、宇宙の大我から派出したる小我、手短かにへば神の分靈と信するのであるから、もとより原罪といふ如き人間に固着したる罪惡のある筈もなければ、世の中の四苦も八苦も皆神の意志に歸着すべきもので、もかくは真迦、悲むは痴呆、人事一切天にまかせ、地にすがれで、榮枯盛衰は天理の必至

四季の變りは人の力に及ばぬ事ぞ、物事時節に任せよ。  
 春に花咲き、夏に實を結び、秋に收穫をすると同じく、其の種さへ蒔いて置けば、時節到來すれば果報自ら至る、

物毎に時節を待す、苦をする事と説くので、何處を叩いても人世を悲觀する音の出でぬのが本領である。

併て聞く「人事を盡して天命を待つ」は易理の極意なりとかや、元來儒教に於ける天命といふ言葉は、其の根本思想に於て大に曖昧糊たるを免がれざるの遺憾はありながら、人事を盡すといふ一點に於て大なる滋味を感得するのである。而も此の思想たるや儒教傳來と共に我邦士流の間に浸み、菅公が「心だに眞の道にかなひなば祈らすととも神や護らん」と歌はれたるを初めとし、古來の格訓至言も少くないのであるが、其の天命といふ根本的思想を合理的に定め、一定不動の基礎の上に置いたのは金光教の力といはねばならぬ。但し以上説述したる所は金光教が樂天觀の上に立てる半面で、無論之のみを以て樂天主義たるを十分に説明し得ぬ、次に更に一步を進め

○樂天主義

○樂天主義  
て見ることよせう。

下

晋の羊祜が人生、意の如くならざること十に八九といつた言葉は、  
今も名言として淡詩人などの社會では折々借用して居るが、さらば  
残る一二分は随分意のまゝになるかといふに、順風に帆かけて順流  
を下るやうな順境に在る人を例外として、人間社會の九分九厘まで  
は不如意に泣いて居るが實境である、「兎角浮世はまゝならぬ」とい  
ふは但歌俗語の常套文句として一概に擯斥すべきものでない、金光  
教祖は此の人世の光景を看取して、  
障子一重もまゝならぬ人の身ぞ。

と誠められたが、さりとて此のまゝならぬ浮世を悲觀して華嚴の龍  
盞の薬屑となつたり、淺間の噴火口の灰となつたり、天地の間に人

まゝならぬ  
の浮世

去今來に  
對する則  
戒

と生れた容易に受け難き果報をむざ／＼棄てるといふは何といふ心  
得違ひのことであらう、此のやうなやくざものは箸にも棒にもかゝ  
らぬとして、今少し氣が利いたところにしても、浮世を三分五厘と  
安く見積り、遊戯三昧に一生を送るか、飲食娛樂の中に身を棄て、  
面白おかしく一時を嗜着するものが多い世の中、達人の目から見た  
ならば誠に以て惘然至極なものであらう。そこで金光教祖は  
心配する心で信心せよ  
真正の煩惱解脱の途は、専念一向の信仰を以て宇宙の大神靈に觸れ、  
歡喜怡悦の心が油然として生ずる時は即ち煩惱除却の時である、  
まゝならぬ浮世の中に自由を得る時であると、人間一生の歸向點を  
指し示されたのである。

金光教祖は現在に對しては、  
やれ痛やといふ心で、難有し、今靈驗をといふ心になれよ。

○樂天主義

といひ、過去に對しては、

過ぎたる事を思ひ出して、腹立て、苦みをするなよ。

といひ、未來に對しては、

悪い事をいうて待つなよ、先を樂しめ、

と丁寧に反覆垂示せられ、神の大なる慈悲に信賴すると同時に、人

生の決して悲觀すべからざるを諭し、所謂人事を盡して、未に来

るべき天命の吉運を待つ福音を傳へられたのである。

「信條」第十條の解釋には

物に自然の道理ありと悟らば、眞の神の道を知る者は天を怨まず、

地に不足を思はず、一向天地任せに世を渡る心をもちて、かなは

ぬ苦をせず、役に立たぬ心配をなさず、吉きも悪しきも、惠深き

天地の神の神慮のまに、廣き眞の道を渡り往けとて誠められし

なり。

とあるは最も平易に明白に金光教の主意を宣明したもので、樂天教の歸趣は實際此の外にあるまい。但し悲觀主義の常に厭世に傾くの缺點あると共に、樂觀主義は動もすれば放縱に流れるの憂がある、此の自然の傾向を摭梅よく調節するは即ち信仰の徳に在るので、金光教祖は常に樂觀と信仰とを並べて提示された主意が合點し得るのであらう。

# 死生の安心

凡そいづれの宗教たるを問はず其の究竟目的は死生の一大事因縁を明らめるの一點に歸着せぬものはない、言ひ換へれば安心立命を得るに在るのである。されば修行といふも信仰といふも、此の目的に達するまでの道中で、自力見性でも、他力念願でも、此の究竟地に歩み入るの手段に過ぎぬのである。古今東西諸宗教の聖者祖師が此の安立の境地に住し、人生の最高意義を發揮したるの事跡は今こゝに言はずもがな、單に金光教祖の行狀を願るも、後輩求道の士に教訓を興ふること至大である。試に佐藤教監の直話にかゝる一事を舉ぐれば、

住持 教祖の安

ある時東京家の武士と稱する二人の者が教祖を訪ね來て無理難題を

吹きかけたことがあります。ところが教祖はそれに應じなさらないものですから、彼等は白刃を抜き放ち、づか／＼と詰め寄せた。教祖は何もいはずに莞爾と笑うてござる。何を不埒なといので、彼の者共は上段に振かぶつて將に一刀を浴びせかけんとした其時に、今は歿くなりましたが、本部より二里西の方に居る高橋藤吉といふ先輩と、今一人大谷に居つた先輩——此人は兼劍と柔術の達人——の二人が何心なくふと参つて見ると、此の有様であるから、二人は突然飛びこんで此の暴亂者を挫いたのでござります。此時に教祖が莞爾と笑うてござつた其の心は、彼等は無理をいうて来る、それを應じないといふために我を斬殺すといふ、若し其刀で我身が斬られて死するならば、此方は此世に於て神様の御用済と心得て居つたといはれました。

○死生の安心

昔は無學祖元が猛獸の如き蒙古の兵に捕へられ、白刃首に臨むに際

○死生の安心

し、從容として「乾坤無處卓孤筇、喜見人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風」と歌つた著名の事柄と殆んど其の鑄型を同じうして居る。殊に「若し斬殺されたなら、此方が此世に於ける神の御用濟と覺悟した」との一語は、如何に甚深微妙の意味を涵へて居るか、そは讀者の玩味に任す。

文學士佐藤金造氏が物せる「十月十日」と題せる冊子中の一節を抄し、讀者と共に更に金光教祖が如何なる安住地を得たるかを觀ようと思ふ。

明治十六年一月元旦、教祖神前に拜伏して、新年の祝詞を大神に捧げ奉らる、其時神宣あり。

本年金光大陣の身に齒は入りたり

と、教祖畏みて神命を請ひ給ひ、息子等に語りて、今年時期來りぬ、日頃説き教へてはあれど、尋ねべき事とも其折々に問へと宣

ふ。

七月二日、片岡次郎四郎參禮たる時、教祖語りて、今日より百日の間修行せよ、然らば金光大陣の修行悉く成就すべしと大神宣ひたれば、今より修行せん、其許も才崎にありて共に修行せよ。又參り得ん限りは度々來るべし、教へ傳ふべきことども尙少からずと仰せらる。

明治十四年の秋より萩雄大人与佐藤範雄とを其折々に侍らせて、此方の教ふる事どもを記せとて傳へられたる御神訓、九月十日までに八十二ヶ條を認め終らしめる。九月二十六日、西六條院の高橋富枝參りしを、控への間に召させて無學の我にかく道を開かせ給ひし事、今更に有難くて泣かじとすれど涙の溢るゝぞと泣かせ給ふ。九月二十九日、神の道を傳へて三拾餘年を越へたり、暫時休息せんとして、御廣前を退かれ、萩雄大人(金光大陣)代りて勤任ら

○死生の安心

○死生の安心

る、廣前を退かせ給ひし後は、控への間に獨居まして家族をも近づけ給はず。

十月三日、佐藤範雄郷里御領に在りて、夜更るまで道を説き傳へて臥床に入る、教祖御控間に隣れる襖に竝びて、東向に入足机三段に設け、上段の真中に靈柩を据え、中段の左右と下段の中央とに眞桐樹てたる前に、教祖白衣に黒紋付羽織りて、敬しく額き給へりと夢み、忽ち直座りて黙拜すに、心を静めよと胸底に響く臥床に就けば又も同じ幻影あり、神前に額けば再び心安かれと心裡に音ふ。教祖の歸幽れ給はん徴兆と覺りて妻に此山を傳へ、急かに出立ちて暗路を西六條院に辿り、誘ひ連れて參上し、御控間の襖を隔て、御挨拶聞え上ぐ。兼てより十月十日は我が永世の祭日なりと仰せられたれば此十日にや歸幽れまさん。退きて安泰き御神去をこそ願き奉らめとて能り歸る。かくて十月九日の夜、家族

を呼び集めて明日愈神と成るべしとの御教ありたり。菟雄は後事を請けて誠實を盡せと宣ひ、又睡眠催したれば寝ん、皆の者も眠れ。三拾餘年帯解かざりしが、今宵は御許を得たれば帯解きて息むぞとて、熟睡に入り給へり。夜も更けて十日となりぬ。曉に間もあらず。夜や未だ明けぬと問はせ給へば、今暫しと聞え上ぐ、東の空ほの白みたり。未だ明けぬと再び問はせ給ふ。襖一重隔て、安齋守(彦照山)の嶺に朝日の影映え初めませりと申上ぐ。其時教祖

あゝ心安しと

歿し給ひて、明治十六年十月十日、明け行く空に神昇りましましぬ。

生死巖に立ちて安詳自如たるの状を思ひ見よ、道に深き者でなければ能る所作でない。

○死生の安心



○死生の安心

一一

以上叙述したる所に依り金光教祖が安住の地の如何なるものなるやは略察知し得るであらうが、是れが決して教祖其の人のみの安心立命ではない、苟くも其の教に入り道の流を汲むものは誰でも此の境致に達しなればならぬのである。そこで金光教に於ては如何なる訓言を以て導きを爲しつゝあるかといふに、頗る單純簡樸なもので「道教の大綱に」

生きても死しても、天と地とは我が住家と思へ。

天に任せよ、地にすがれよ。

といふ二個の教訓なるに過ぎぬ。然しながら此の單簡なる教訓は金光教が其の立脚の教理から必然に來るべき法則で、詳しく註脚を施したなら随分種々の葛藤を打出し得べきも、天といひ地といひ、幽

といひ顯といひ、大我といひ小我といひ、既に幾たびも反覆した事柄であるから、こゝには繁を厭ひて之が架説を止め、只左に佐藤教監が見解を紹介することゝしよう。彼はいふ

天とは顯幽の幽の意味で、吾等が此肉眼を以て見る能はざる限の幽が天である。尙いはず、此五尺の身體を除く外上下四方皆天である。此の大地を除くの外上下四方皆天である。然し此身體中にも大地中にも亦天がある。而して地とは吾等の肉體の居る所である。此の如くにして、人間は此肉體は現世の者にして吾等の目に見て居るが、此肉體を活かしてあるものは吾等の神靈である。活きて働いて居る間は確に此の神靈は我身體の中にある。此神靈は我等が現世の肉體の中に於て、幽界である。されば此肉體は大地に屬し、吾等の神靈は天に屬して居る。是を以て、人間は天地の道理を具へて居る、故に昔の人も人は小天地なりと云うたので

○死生の安心

○死生の安心

あらう。吾等より大い天地が大天地である。人の現世に居る間は、無論天の間に生まれ、大地に活されてある。又顯と幽とは別物の様なれど一ツである、一ツのものを顯と幽とに分て天と地といふのである。生るゝ時は幽より顯に出で、死ぬる時は顯より幽に歸るのである。此形體と神靈とが別れて元の天地に歸るのである。「天と地とは我住家と思へよ」との教、簡にして人生の安心これにて十分である。それから「天に任せよ地にすがれよ」とある、天は神靈の出でたる源にして、地は肉體の出でたる源である。人は天地の眞理に因て、天より神靈を得、地より肉體を得て生れたのであるが故に、死即ち我等の神靈肉體が天地に還らんとする時は、如何に之を止めんとするとも決して我等の自由にはならぬ。生きて居る間天地の神の司配中にあるは勿論、死しても天地の神の懷の中に居るのである。生ては天地の神の懷の中に活動らき、

金光教は  
未來世を  
説く

死ぬれば天地の神の懷の中に休息するのである是程結構なる事が復と世にあらうか。死生を通じ、一切萬事唯神任せにせよとの意である云々。

是れで一應の道理は會得せられる筈である。之を他教のそれに比べて見ると何となく飽味なきやうな感じがする、それも其の筈で、小乗佛教又は耶穌教に於ては人間死後の状態を種々に想像し、或は六道の輪廻を説き或は神の審判を説き、天堂を説き、地獄を説き、其の機關のなかく複雑なるに反し金光教に於ては會て一言も死後の禍福を説かぬ、竟畢金光教の認むる所に依れば、生とは宇宙大神靈の小波瀾小分派で、死は其の還没を意味するが故に、生の必ず福ならざると共に、死も亦決して禍にあらず、父母の懷に出で父母の懷に歸る、何の煩悶かあらん、何の苦痛かあらん。況して死にたる後に六道を輪廻するの、神の審判の庭に牽き出さるゝのといふやう

○死生の安心

○死生の安心  
な空漠たる不合理の感想は何處にも宿すべき餘地を有せざるは其の  
教理である。吾等のもとより宗教上の深き理窟を知るものではない  
が、下手な未來世の事を説く宗教は到底今日以後の社會に適應すべ  
しとは思はれぬ。此點に就ては金光教の教理が大乗佛敎と共に頗る  
合理的であると思ふ。然しことに一箇の疑問の提出せらるべきは、  
人間の三寸息たれたる後は、釋迦も提婆も孔子も盜跖も蕪蕪一器何  
等の差別を認めざるかといふの一事である。積善積惡何等かの應報  
あるを望むは人類の天性である、知らず金光教は之に向つて如何な  
る解決を興へるであらう、讀者暫く次回の分解を待て。

## 永生

人生七十古來稀なりで、大概は五十か六十かで死んで了ふ。全國民  
の生命を平均して見ると僅に三拾幾年より上に出ないといふことで  
ある、いやはや誠にはかないことで、昔から蜉蝣の生命といつてあ  
るが、なんのそれどころか、無限無窮の宇宙から見れば電光石火の  
刹那といはうか、全然形容もなにもできぬ短いものである。此のは  
かない短い生命の間に、苦んだり樂んだり、泣いたり笑つたり、ま  
こと一場の喜劇を観るやうなものであるが、さて自分が此の劇中の  
一人となつて見ると、只掌を抵つて笑つて済ませるわけには往かぬ。  
それには人には誰でも皆分相應の慾——希望といふものがある、實  
際人間は希望の塊ともいふべきもので、全く希望のないものは華嚴  
か淺間に往くより外に致し方がない。まかも此の希望は殆んど行止

○永生

短き人生  
に無限の  
悠遊

りのないもので、一個の希望を達すれば又新たな希望が出て来る。それが遂げれば又々新しいやつが出て来て、いつになつてもこれで澤山といふことがない。例へば金が溜れば名譽が欲しくなり、名譽が相應に揚がれば長壽がしたくなる。秦の始皇帝が六國を併呑して、支那國內を統一し、有ゆる自己の慾望を充した後に、不老不死の仙藥を我が日本に求めたといふも是れである。世俗に「死んで生命のあるやうに」といふ言葉があるが、決して一場の戲言でない、眞個人間の慾望を有のまゝにさらけ出したものである。まかもこれが人間天賦の至性で、如何なる宗教も倫理も之を曲げて矯め直すことができないものである。然らば金光教は之に對して如何なる態度を取つたのであらう。

佛敎は因果の律法を眞向にかざして、理論的に人間の感性を支配しようとするので、従つて其の未來世を説くにも因縁業報に依らな

ければならないこととなり、輪廻説や涅槃論は従つて起る。基督敎では一切萬象皆ゴットの攝理に歸し、人間在世の間の善行悪行共にゴットの審判に依つて終局を告ぐと立て、いづれも前述の人間の天性に對する最後の決定を與へてあるが、金光教は其の教義として未來世を立せざるが故に、佛耶二敎のやうな都合よき大團圓を結び難い傾向を有つて居る。然しながら人間終局の希望に對して全く之を等閑に附するわけには往かぬ、否之を等閑に附しては宗教の意義を半ば失却することとなる。何となれば宗教は畢竟人間の感性に満足を與ふるものなるが故に「神より出で、神に返る」これで汝は澤山だらうといふばかりでは、どうしても此の條件を充たすことができぬからである。見よ金光敎祖の訓言にいふ、

生きたくば神徳を積みて永生をせよ。

是れ最後の光明である。金光敎祖は此の最後の光明を辿るべく、自

己の行蹟を以て許多の道標を残したのである。彼は生前に於て「生神」と名乗り、死後に於て多くの信徒に向つて無限の感化を被らすも、只此の神徳を積み、永遠無窮の生命を保持するためである。佐藤教監の解にいふ、

抑も生神とは人の本務を盡し、天地の大理を悟得して願幽に感通し、現世の人にして能く神と一致し、神の無偏の徳に契合して、神意を世人に傳ふる人にして、教祖は心行の徳に依りて遂に神人相合し、生神の位に進まれたるにて、教祖は人にして神、神にして人におはしたるなり。

こは教祖についての解であるが、凡そ金光教の信徒にして、眞個の堅固なる信仰の上に立ち、立派に修行を成就した上は、何人と雖ども皆此の位地に進み、生きて生神となり、死して永遠の生命を得ることとなり、こゝに人間至性の希望を十分に達し得られるわけとなる。

る。是れが金光教の最後の一句である。

# 結 論

吾等秃筆を呵して金光教側面觀をもものする斷續三拾餘回に及び、不十分ながらも略其の一隅を擧げ得たと信するに依り、他の三隅は之を讀者の推察にまかせ、一先づ終結を告げることとして、茲に聊か吾等が感想を述べて結論に代ようと思ふ。

顧みれば金光教が金光大陣なる預言者に依りて娑婆世界に呱呱の聲を揚てから、年を閱すること五拾餘、殊に一流獨立の宗教として金を看板を掲げてからは僅々拾數年に過ぎぬ、此の短き日月の間に教會所を設くること全國に遍く、其の聖場たる備中大谷の本部には日々各地より巡拜參詣するもの百に下らず。若夫れ定期の大祭に至りては殆んど人を以て埋め、流石に運輸力の大なる山陽鐵道も屢窮迫を

告ぐるの實況あるは吾等が現に目撃する所、蓋し罕に見る所の成功といはねばならぬ。而も其の此の如き盛況を致せる所以のものは聖ポロの基督に於けるが如き有力なる後繼者が盡瘁の成果にも依るべけれども、要するに教祖の人格と教義の現社會に適切なるに歸せざるを得ない。若し吾等をしてカールライルの標に倣ふことを許されなば「宗教家としての英雄」の一人として吾等が英雄崇拜論の一章に收むるに躊躇せぬものである。

然るに世には其の實體真相に就て一應の觀察吟味をもなさずに、例の淫祠邪教と同列に視て、續いて金光教祖の人格に就き許多の疑惑を挑み、或は衆愚を欺くの妖人と斥け、或は虚偽の權化たる山師と見做り、妄誕無稽の教を宣傳するものと臆想するが、識者と自稱する連中にも随分少くないやうに見えるが、是れ最も憐むべき代物で、田舎犬の見なれざる姿に吠ねると一般、却て自己の耻辱を増ばかり

なるぞ氣の毒なる。試に思へ、全國に散在する我が同胞兄弟にして、金光大陣の宣言を信じて、之を人生の指南車と仰ぎ、之に頼りて生き、之に頼りて死ぬるもの凡そ拾數萬、彼等は佛陀を知らず、基督を見ず、只金光大陣の名に頼りて彼等の安心立命を得つゝある底の宗教を指して只一齣の不分下の精神的戯術と爲すを得るか、吾等は断じて去かく考ふことが得せぬのである。

詐僞師や山師や、一時は人の目を眩惑して種々の詐術を行ひ得べきも、長き年月に亘つて化の皮を剥がれ、尻尾の尖を現さずに居ることとは此の世の中にはない。元來社會は愚昧の雲を以て掩はれてあるやうに見ゆるけれども、長き間には赫々たる陽光の隈なく射して、妖怪變化の潜み居るを許さぬものである。金光教祖が若し果して虚偽の人間であり、其の教旨が妄誕無稽のものであるならば、其の在世の間こそ多少人目を味まし得べけれ、到底五拾年六拾年の長きに

亘つて其の信用を墮さぬといふわけには往かぬ。況して教祖在世の間には僅に附近邑落に信徒を有するに止まりたるものが、其の長逝歸幽の後に於て俄然として膨脹し、其の教に歸依するもの次第に増加し行くが如きは決して有り得る道理がない。若し此の如き奇怪千萬なる現象が此の世の中に存在するものとするならば、人間の理想も、社會の文明も何もあつたものでない。従つて世界の事物、一として信用すべきものなくなつて了ふ筈である。敢て問ふ虚偽の山師が一派の宗教を創建せりといふか、古人いはすや虚偽の人は一瓦屋だも造る能はず、若しも彼にして誠實に白堊粘土磚瓦等使用物の性を知つて之に従事するにあらずんば、其の造りたるものは家にあらずして只是れ廢殘の一堆のみと。移して以て金光教祖を評するに適切なりとせずや。

彼等は金光教祖を以て一個の濱口熊嶽なりとするか、一個のお幹婆

ななりとするか、一個のカリオストロ（シ、リーの大詐欺師バルサ  
モ一の綽名、不老の秘法を授けると稱して金銭を詐取せし悪漢）な  
りとするか、而して其の宣傳せる教を以て贋造紙幣として之を拒ま  
んとするか。釋迦も基督も亦詐僞師の親玉にして、一大藏經、新舊  
聖書皆是れ贋造紙幣といはなければなるまい。此の大小の詐僞師を  
生理にし、此の世界に彌蔓せる贋造紙幣を焼き盡すには、秦の始皇  
の手を假るより外に致し方がない、彼等果して秦の始皇の乾兒たる  
を甘んずるであらうか。

二

願くは吾人に再びカールライルの言を借用するを許せ。カールライルは  
いふ、世界の暗黒を照破する所の偉人の光明は、他の點火を俟つの  
燈燭にあらずして、皇天の賜に依り自然に輝き渡る發光體（太陽の

如き）の如く能く自家の光輝を發越するものなり。故にいふ、「天授  
獨創の識見を有し、崇高雄偉の人格を具ふる。遍照光明の源泉なり」  
と。金光教祖は眞個自家の光明を發越せるものである。

金光教祖の無學（普通に稱する學校的教育）であつたことは吾等が  
屢言明した所で、彼が農夫的經驗と六藝一問に於ける生活とは其の  
教育の全部であつた。彼自らも無學の彼に天地の秘鑰を啓きたまへ  
る神の寶賜を感謝したばかりでなく、常に人間の作りたる物を讀む  
能はずと明言して憚らなかつた。實に彼は只自己の心眼の力に頼り  
て、無邊際宇宙を洞觀して神と冥合したのみである。若し金光教  
祖にして少しにても他人の構成せる思想を受け容れたものありとせ  
ば、それは民間普通に行はるゝ説話か、おぼろげながらも時々其の耳  
朶を打ち來る世間の風聞に過ぎなかつたことは明である。  
所謂教育あるものは、學者の著書に眼を掩はれ、古來の傳説に思想



を束縛せられることは大抵逃れ得ざる常習である。それ故に彼の達磨宗の如きは、千聖不傳不立文字の看板を掲げ、此の葛藤巢窟を脱して、直ちに第一義に突入せんと勉むるのである。幸にも金光教祖は世の所謂教育を受けなかつたがために、此等の蜘蛛の網に引かれる厄難を逃れ、唯自己の心霊と事物の實相と並び在るばかりで、即ち『人與彌陀共一龜』底の境遇に立ち得たのである。金光教祖の神に對する、初は恐怖を以て之を觀、之に玄妙偉麗を以て之を觀、次第に宇宙の秘義を味ふに到達したのである。彼は自ら問うていふ、抑人とは何物ぞや。我等が宇宙と呼び做す、此の玄妙なるものは何物ぞ。生とは何ぞ。死とは何ぞ。我何をか信すべきか。我何をか爲すべきかと。此の至誠の間に答ふる天來の神音は縹緲として彼が心胸に響き、積んで八拾餘條の訓言となつたのである。此の天來の神音は實に宇宙の心から來たもので、之を聞き之を味ふる

ものに在つては、世間の學說傳説の如きは眞個に大風の中の放屁にも値ひせぬのである。願くは吾等に三たびカーライルの言を引用するを許せ。カーライルはいふ、

斯の如きの人は吾人之を獨創的人物と呼ぶ、彼は眞源頭より獨歩し來る。彼は無限の不可思議界より其の消息を傳へんがために降りたるの使者なり。吾人故に彼を呼んで詩人といひ、豫言者といひ、神といふ——所詮、吾人は彼が吐き出す言語の他人と全く品類を異にするを感知すべし。彼は事物の實相より直下し來るなり——彼は日々に這箇と交通して生息し又玄かく生息せざるべからず。道聽塗説の言は彼の聰明を掩ふ能はず、彼若し道聽塗説の言に従はざらば直に是れ盲目のみ、喪家の狗のみ、流亡の民のみ。幸にして這箇は彼の頭上にきらめき渡りぬ。眞個に彼の言語たる『天

啓』の一種たらざるを得んや——我等他の名稱を附せんとするも  
 適稱なきを如何せん。彼は天地の心より出て来る。彼は事物の元  
 始實相の一部たり。神は多くの啓示を爲せり、而も又若而人をし  
 て世界に於ける最新最後の天啓を降さしめたるにあらざるなきか。  
 The inspiration of the Almighty giveth him understanding. (全能の神のインスピ  
 レーションは彼に悟得を與へぬ) 吾人は他を後にして彼に聴かざ  
 るべからず。

こは是れカールライルが亞刺比亞の聖人モハメットを賛せるの言なる  
 も、恰かも我が金光教祖のために發したるが如く、吾等はこれ以上  
 に一辭を加ふるの餘地を有せぬものである。

三

天地の秘蘊より發し來り、人間社會の上に投げ與へられたる金光教

祖の光明は、今や漸く多衆の仰ぐ所となつたが、彼は世の所謂教育  
 なるものを受けなかつたがために、其の教旨を理論的に組立て、組  
 織的に説述し、乃至修飾せる文辭を以て人目を眩惑するが如き、巧  
 妙なる手段を取り得なかつたのである。今現に金光教内に於て金科  
 玉條として奉せられる八拾餘條の訓言を初として、各信徒の間に散  
 在せる『御理解』と稱する教訓に至るまで、いづれも亦零々碎々の  
 断片的である、諺語的である、短詩的である、若し研究者にして仔  
 細に其の含蓄を吟味咀嚼せば、一條の理路の坦々として長安に通ず  
 るの大道を發見し得べきも、俄然として之に接するときは恰かも磊  
 々として川原に散在せる石を見るとき一般、相互の間に何等の貫通せ  
 る文理もなく脈絡もなきが如きを感じずるであらう。然しながら是れ  
 強ち金光教祖に於てのみ見るばかりでなく、學徳兼備の釋迦牟尼を  
 除くの外、基督も然りモハメットも然り、孔子の如きすら猶其の傾

向あることは論語に於て証明せられる。畢竟至人の言は研究の結果に出でたるものにあらず、神秘的感悟に依りて得る所なるを以て、世の學究先生の如く、整然たる組織の下に強いて論理にあてはめるやうなわけには往かぬ。

さりながら吾等は金光教の現在を以て、完全にして遺憾なきものと過褒の言葉を贈るものでない。幾多の缺漏、幾多の罅隙は凡眼の吾等では歴々として指摘し得るは實際である。之を補綴修整して金聲玉振の大成を期するは、今後此の教會の牛耳を執るものゝ大なる責務であらう。佛教に五時八教、五千餘卷の教典ありといふも、決して釋迦牟尼一代の金口から吐き出されたものばかりでない、世々代々百千の釋迦を経て吾等が現在目撃するやうな集大成を得たのである。基督教も亦然り、其の基礎たるモーゼの律法の如き、今日から之を觀れば眞に幼稚にして笑ふべきであるが、耶穌を經、ポーロ

を經、希臘哲學印度宗教を吸収し消化し、爾後許多の神學大家の修飾補整を経て今日の有様を呈したものである、凡そ宇宙間の事物は一として進化の理法に支配せられぬものがない宗教も亦人類社會に於ける一現象である以上はもとより此の理法の外に漏れ得ざるは明かな次第である。世界の二大宗教たる佛耶兩教に於てすら、百千の釋迦あり百千の基督あり、漸次に其教旨を化醇した事實の存在する以上は、今後の金光教に於ても百千の金光大陣を要することは必然である。少くとも馬鳴、龍樹、ポーロ、ルーテル等の名に依れる向上進歩の段階を經ざるべからざるはいふまでもなき事であらう。金光教の今日は渾沌として原始の状態に在るは、獨り門外漢なる吾等の目に映するばかりでなく、教内の人々も亦まかく自覺する所であらう。其の教義を闡明するに就ても、憑るべきものは此の渾沌たる宗教の基礎たる八拾餘條の遺訓を除くの外に、僅に信條十二箇條

の釋義と、佐藤教監の物せる『天地の大理』の外何物もなく、一宗の生命とも稱すべき教祖の傳記すら調査せられない、況して教祖が三拾餘年間の教訓即ち『御理解』と稱するもの等は直信教徒の記臆の中に存在するばかりで、其人の死歿と共に永遠に滅亡して了ふやうな有様となつて居る、今の内に之を結集して弘通的永久のものとななければ、異日臍を噬むの悔を取るであらう。序でなればこゝに言つて置くが、佐藤教監の『天地の大理』の如き割合に組織的に書き述べられてあるが、中には随分つづつまの合はざる箇處も少なくない、其の金光教を以て自力教にあらず、他力教にあらず、神人一致教であると標榜せるが如き、意氣の壯なるは大に嘉すべきも、強いて異を立てるの識は免れ得ない。神人一致が好し金光教の極旨であるにしても、こは是れ教旨の抽象で、自力といひ他力といひ宗門の具象的名目に對照すべきものでない。其他に於て小疵瑕の指摘

すべきもの少くないが本論の主眼でなければ之を省くこととする。莊子の寓言に、南海の帝を條といひ、北海の帝を忽といひ、中央の帝を渾沌といふ、條と忽と渾沌の領地に於て會合した時に、渾沌厚く之を待遇した、條と忽と渾沌が此の厚遇に報せんとして、人には皆七個の竅があつて、視たり聽いたり食つたり嗅いたりするが、獨り渾沌にないのは不都合である、御禮に之を穿つてやらうではないかと相談して、一日に一竅を穿つたところが、七日目に渾沌が死んで了つたと書いてある。釋家でいふ大死一番、一活現成とはこのことである。渾沌が死ななければ目鼻がつかぬ、目鼻がつかなければ、いつまでも渾沌で居なければならぬ。もごとく迷信打破のためについた金光教が、無識の教師等のために動もすれば迷信の動機を作り、蓮門天理など一列に見られるやうなぶざまを照して居るのも全く一宗の目鼻が洞然として開通しないからの結果である。教内

附

録

金光教側面觀 終

○結  
の局に當るもの今月今日を以て奮躍するなくんば、金光教祖が  
真心の道を迷はず失はず、末の末までも教へ傳へよ。  
と言ひ残された訓誡を失却するに至るだらう。

# 附 録

## 日本の祖先教

上

之を生物學者の研究に稽へ、之を進化論の事實に徴し、之を人類共通の性情に照し、之を道徳宗教の訓典に訴へ、余輩は人類の精神を活動に在りと認め其事業は種族繼續に在りと解し、其究竟目的は永遠の生命を得るに在りと斷す、若し余輩の斷定をして大なる誤謬なからしめば、人間行爲の規範及び信仰は之に依りて解釋もし選擇もする所なかるべからざるは自然の理なり、余輩は此見地よりして少しく日本固有の祖先教につき、其價値を觀察せんと欲す、併しながら愛に一應の詮議を経ざるべからざるは、日本祖先教が如何なる影響を世道人心に與へ、如何に世の先覺者をして之を解釋せしめつゝある

○附 録

かの一事是なり、余輩は之について識見ある政治家大隈伯爵の言を借るを以て最も便利なりと考ふるなり。

近時大隈伯は一外客が日本の教育が宗教と關係を有せざるは、果して完全なる德育を施し得べきやとの間に對し、人類社會には時代と場所とに共通なる善若くは惡の存するあり、而して名に拘泥せざる宗教的信念も亦存す、此共通なる點を比較研究して、感情一方に馳せず、合理的の道德標準を立つるは最も進歩せる社會の現状なり、是故に日本の學校に於ては或宗派の道德に限りて準據するが如きことを爲さざるは、寧ろ世界に於ける最新にして且最も發達したる教育方法なりと確信す、強て日本に於ける宗教的分子を摘發せば、固有の祖先教のみにして、之を倫理上より各宗教共通の善若くは惡とするものを合理的に捉へて德育の標準に供するのみと答へたりと云ふ、大隈伯が日本の德育を論するや善し、恐らくは有識の異議なき所なるべし、然れども審に其言を検するに少しく放散に近く、祖先教の感化を認むること稍輕きに夫

せるを遺憾とせざる能はず。

抑日本の祖先教なるものが現時學者の論定せる或種の定木に照し、果して長短過不及なく合格するものなりや否は余輩の知らざる所、好し知るも之を言ふを欲せざる所なり、さりながら所謂宗教なるものは一神教たると汎神教たるとを問はず、其根底極めて不明確にして、科學の規則を以て律すべからざるは勿論、其最も最近き哲學よりも亦見離されある程の不束なるものにあらずや、要するに人類感情の要求に従ひ、假定的大威力大慈悲の偶像（然り余輩は之を偶像と呼ぶに躊躇せず）を造り、他力掩護を求むるものに外ならず、此の如き性質のものに對し、なまじ學問上の規則を應用し其可否優劣を定むるが如きは、寧ろ無用の詮議立に近からずや、且夫宗教の効力は理論の高遠微妙なるに因らずして、其感化力の活動盛なるに在り、例へば基督教の膚淺なる教理は到底佛教の甚深微妙なると目を同うして語るべからざるも、其感化力の活力は却て膚淺なるものに存し、同じく佛教中に在りても天台華嚴乃

至禪宗の如き高遠なる理旨に富むるものは、却て真宗浄土法華の如き卑近にして人心に入り易きものに劣れるにあらずや、見るべし宗教の生命は理論の高否に關係を有せざることを、此故に余輩は日本固有の祖先教はたとひ學者の定めたる定木に合格せずとも、其感化力の程度如何に依りて價值を検するを以て議論の正鴻を得たるものとする所以なり。

事實は無上雄辯なり、我が祖先教が有する感化力の眞價値は遺憾なく日露戦役に於て證明せられたり、當時我が將卒の胸裡に燃わたりし熾烈なる忠孝觀念は、果して何處よりか得來れる、或者は之を普通教育の普及に歸し、或者は之が爲めに傳來の武士道に感謝すと雖ども、枯乾せる一片の格訓は決して人に宗教的熱情を興ふるものにあらず、當時敵國人が我が將卒の猛烈なる愛國心を稱えて迷信狂と稱せるに徴するも、決して理論若くは義理より割出したる行動にあらず、必ずや活潑々として生ける泉を附與せる宗教の其後に潜みたるを信するなり、之を佛教に歸せんか、其極めて無力なるを如何せん、

之を基督教に持行かんか、寧ろ其反對に出るなきやを恐る、余輩は我が將卒の勇氣と熱情とを鼓舞振作せる大なる原動力は疑ひもなく固有の祖先教なりと断定するを憚らざるなり。

### 中ノ上

日本の祖先教が其形式と理論とに於てたとへ闕如する所あるも、偉大なる感化を國民の大部分に與へたることは、吾人既に之を事實に見たり、更に進みて聊か其原由を討究する所なかるべからず、以下暫く冒頭に掲げたる余輩の見地に基つき三大段に區分して之を略述すべし。

人類の精神は活動に存す、活動は物質的供給を須つよりも無形の糧を要すること寧ろ盛なり、基督が「人は麵包のみにて生くるものにあらず」といへりしは此眞理を喝破せるものにして、古往今來社會の表面裏面に於て活動せる人士が、孰れか天地の正氣を呼吸去、精神の給養を勉めざるものぞ、是故に



凡そ人間社會に存する典範遺訓乃至宗教に至るまで、此活動の原力を興ふるものは榮々、否らざるものは亡ぶ、看よ曾て歐州を統一せる羅馬加特力教の如き、其の餘りに形式的に流れ活力を滅却せるの故を以て、次第に其の版圖を滅し、纔に舊來の惰力に依り奄々たる氣息を維ぐの狀あるに反し、同じ基督教中に在りても新教の威力は隆々として殆んど天下を席卷せんとするの勢あるは、其活力の泉源混々として盡きざるに因るにあらずや、之を本邦に徴するに、亞細亞大陸に蔓延せる小乗佛教の一衣帶の海峽を隔てて我邦に入る能はず、之に反して大乘佛教は既に大陸に亡びて獨り日本に嚴存するが如き、極めて趣味と價値とに富める歴史的現象といふべく、畢竟日本民族の優秀なる頭腦が、小乗佛教の消極的厭世的なるに求むる所なく、活卓なる大乘の教理に隨喜せるを現はし、從て大陸諸國の老衰と日本の勃興とは其由來する所の違きを見るべきなり、此の如く大乘佛教が一時我が國民に歡迎せられたりと雖ども、晩近三百年間政權保護の下に漸く腐敗を來し、全く其活力を失ふ

に及び、國民の要求は更に他方面に走り、比較的清新なる基督教を迎へんとするの氣運を現じ來れり、以上は皆歴史の証明する事實にして、活動的民族と活力ある宗教とは相互に因果的關係を有するや明かなり。然らば日本の祖先教は國民の活動に對し如何なる地位を有するやと考ふるに、祖先教は實に日本民族原始以來の傳説に基づくものにして國民の腦裡に浸染したること甚だ深く、たとへ如何なる宗教が完備せる形式を以て甲冑と爲し、玄妙なる理論を以て武器と爲し、折伏攻撃を試むるも、國民の信念毫も之が爲に動搖せられず、古哲弘法大師が本地垂迹の方便説を立て、兩者の調和を謀りたるが如き、決して一時的教法弘通の手段たるに止まらず、しかせずんば到底國民の精神に満足を興ふる能はざるの止むなきに出づ、近來基督教徒の一部に於て日本魂はロゴスの化現なりと唱ふる者あるが如き、其言の可否は置いて論せず、亦國民の要求に應せざるものといはざるべからず、何となれば日本魂は即ち祖先教の精髓に外ならざればなり。

然らば則ち我が國民は祖先教に依りて如何なる活力を賦與せられしぞ、余輩は先づ原始民族に就きて歴史家の説に稽ふるの必要あるを認む、歴史家はいふ我が民族が日本に來住せる遠征の徑路を按ずるに、一は崑崙の北部より蒙古滿州を経て朝鮮半島に入りしものと、一は比馬拉亞の南部より東印度南清を経て琉球諸島に入りしものと、本邦に於て再び會合せるものゝ如し、而して此等の遠征に成功せる民族は、優良秀抜の種族にして、劣悪なるは皆途上に殘留して此土に達する能はざりきと、此説に依るときは我が民族の祖先は、海山萬里、幾世紀の時日を費して、此豊葦原の瑞穂の國を發見し、其風土の善美を愛して爰に永住の居を定めたるものにして、其活卓なる能力と至大なる功勞とは、子孫萬世の精神を鼓舞して餘りあるべし、是れ本邦に於ける各種の神話が歐西古代のものに比すれば遙に其選を異にせる所以にして、又一變して祖先教の基礎と爲りし所以なりとす、之より以後有史以來の偉人英豪に至りては全く余輩の絮説を須たざる所、其人格を慕ひ、其德馨を尊び、其

功績を仰ぎ、禮拜崇敬するの間に油然として天來の感化に接するは、必ずしも我が國民の専有にあらずと雖ども、既に祖先教に於て大なる趣味と素養とを有せる日本民族の収益は、他に比えて自ら深からざるを得ざるは理の然らしむる所なり、此の如くにして我が國民は過去に於て祖先教の爲に大なる活動を賦與せられたり、將來百世の後と雖ども亦之を推知するに難からず。

### 中ノ中

夫れ種族繼續は生物界の大現象にして、人類特有のものにあらざるは論なしと雖ども、人類に在りては他の生物と稍其趣を異にし、管に物質的方面の系統を傳ふるに子孫のみならず、併せて精神的方面の系統を垂れざるべからず、例へば同じアリアン種族中に在りても羅馬民族と日耳曼民族とは其體質に於て相違の點あるが如く、精神界に於ても亦自ら別統に屬するを否むべからず、大和島根に定住せる日本民族が東洋的思想系統を受けしは勿論なるも、之を

東部亞細亞諸民族に較ぶるに、其間截然たる區劃の存するありて、經渭の相混合するに至らざるは、猶其狀貌の相違せるに同じ、此の如く各種の民族各先天的標章を具へ、互に相侵犯するを許さず、たとひ多くの年所を経るの間に、外來の刺戟と内部の景況とに依りて化醇變轉（場合によりて退步）を免れずとするも、其心根に横はる一片の精髓の長へに民族の存在と相終始すべきものなり、余輩は之を稱して國民の正氣といふ、我が日本に在りて「敷島の日本魂」と唱て朝日に匂ふ山櫻花と共に世界唯一無價の寶と自信するもの即ち是なり。

日本魂は固より哲學的に批判研讃して其眞價を發揮し得べきものにあらず、又之を科學の俎上に載せ無殘にも骨々節々に分析するが如きは吾人の好まざる所、好し之を分析するも恐らくは其實相を明らかめ得べからず、吾人は只之を詩美的に讚歎し、宗教的に渴仰するに依りて、初めて其玄妙不可思議底の靈光に浴すべきなり、此神秘なる日本魂が果して何處よりか得來れる、是れ

豈に吾人祖先が秀拔なる精神の遺傳にあらずや、吾人の祖先は日本民族てふ肉體的系統を垂れしと共に、此千古不拔の大精神をも併せて吾人に貽したり、吾人後昆が愛敬追慕して渴仰の意を致す、豈に之を非理非文明なりといはんや、若し我が祖先崇拜を以て非理なり非文明なりと嘗る者あらば、是れ佛教徒の釋迦に隨喜するを嘲ひ、基督教徒の耶穌を讚美するを嘲けるの徒のみ、何となれば釋迦耶穌の精神は其教徒の精神たるに等しく、日本祖先教の精神は日本魂にして、日本魂は日本民族に普遍のものなればなり。

歴史を按ずるに何れの民族たることを問はず、一度は祖先崇拜の時代の存在せざりしは稀なり、今や世界の祖先教は業に己に消滅し、之に代りて人格的天神若くは阿彌陀如來の如き彼の徒が唯一實在と信するものを禮拜するに至れるは何ぞや、思ふに許多の錯綜せる緣由あるべしと雖ども、其民族の集團變遷興廢常ならず、朝に起りて暮に仆れ、此處に聚りて彼處に散じ、流轉の間、種族系統の繼續と統一を保つ能はず、從て其民族の靈光たる精神に多く

の雜駁と玃瑕とを與へ、後昆子孫をして祖先の威靈を認むるの心、漸く荒廢に歸せしめ、之が反動として常住不變の神靈を追求するに至るは、人心自然の傾向といはざるべからず、之に反して我が日本民族は此大八洲の樂園に據りしより以來、天塹の海は大陸の荒き風潮を遮り、他の種族の一起一伏に與かることなかり去が故に、系統最も明にして、統一缺くるなく、祖先崇拜の教も亦從て最も長く繼續もし發達もせるは疑ふべからず、吾人は此點より考察するも萬世一系の帝室を戴きたる日本民族の幸福を慶し、更に進みて祖先教の天壤と共に無窮に榮ねんことを祈らざるべからず。

## 中ノ下

古の人いへるあり、太上は徳を立て、其次は功を立て、其次は言を立つと、余輩が永遠の生命といへるもの之に近し、夫れ人の天地の間に寓する、滄海の一泡にだも遙に劣れり、五尺の軀體を有すと雖ども、空間を填むる所なきに

等しく、倏忽六十年の生命、時間に於て何の驗する所ぞ、白樂天は歌て曰く、蝸牛角上何事をか争ふ、石火光中に此身を寄す、隨て富めば隨て貧し且らく歡樂せよ、口を開きて笑はざるは是れ癡人と、露の間の歡樂を肆まゝにし、貧富得喪の屈託を忘るゝを以て賢き考なりとするが如き、流石に支那的根性にして、固より吾人の與せざる所なるも、人生のはかなきを察し、何等の法に依りて比較的に廣き空間を充填し、比較的に長き時間を保有せんとするは人類自然の要求なり、各種の宗教は此要求を充さんが爲め、所謂未來世なる假想説を設け、纔に人間に安慰を與へんことを謀れり、一派の哲學者が今日尙靈魂存在の説を固執しあるが如き、進歩せる學説より之を觀れば只一笑に値すと雖ども、宗教的頭腦の考案と去ては決えて無理ならぬ次第なり、日本民族は此點に於て卓越なる考を有去たり、看よ『人は一代、名は末代』といへる諺の如き、遍く全國に流布去て向上の指導と爲り、『武夫はたゞ名こそ惜まけれ』といふに處世の一大教訓として儼存するにあらずや、即ち日本民

族は人生のはかなきを知ると共に、醉飽歡呼の裡に憂愁を拂ふを否定し、又空漠たる未來世に信頼せず、只芳名を千萬歳に傳ふるを以て永遠の生命を得るの唯一理想と爲せるものなり、此理想と祖先教との關涉は極めて親密にして相離るべからざるは何人も之を看取するに苦まざる所なり。

蓋し吾人が祖先を敬慕す、祖先を崇拜する所以のものは、單り其肉體と精神との垂統者たるの爲めのみならず、其徳化の聲きに浴し、其功業の盛なるに景仰し、其遺訓に依りて心思を啓發せらるゝの多きに感謝するものならずんばあらず。

畢竟吾人の現在は祖先が立德立功立言の賜に歸するが故に、現在の吾人も亦將來の吾人に向て立德立功立言の賜を貽さざるべからず、即ち吾人が祖先永遠の生命を祀り之を追慕するに同じく、吾人が永遠の生命をも子孫後昆に承認せしめざるべからざるなり、余輩は此點につき彼の佛教若くは基督教の其教祖たる一箇人の永遠の生命を認め、其他の偉人傑士を没却し去るに比すれ

ば、日本祖先教が寧ろ人生の意義に於て極めて適切なるものあるを信ず、何となれば、釋迦基督固より人豪中の人豪に相違なしと雖ども、東西兩世界の文明は決して彼等兩個の獨力に依りて打立てられたる者にあらず、希臘の古哲、羅馬の先賢乃至近世無數の大思想家大事業家の寄與する所、歐西の文化を形造るに於て遙に基督が三年間の説教の上に出づ、余輩は信す好し百の基督ありと雖ども、一のプラトンなく、一のアリストテレスなく、一のデカールなく、一のニュートンなく、一のベーコンなく、一のカントなく、一のリレオなく、一のワットなく、一のダーキンなく、一のエゲン等なからしめば、歐西の文化は畢竟古代希伯來の文化のみ、如何ぞ燦然として人目を奪ふこと今日の如きを致さんや、試に之を東洋の文明に徴せよ、三千年來許多の釋迦を出し一切藏經數千卷を有する印度は今果して何の状ぞ、二千五百年來多數の孔子を出し、數千卷の四庫全書を有する支那は今果して何の状ぞ、若し歐西にして單に多くの神の子をのみ有したらしめんには其現在や亦知る

べきにあらずや、日本の祖先教は固より人格的唯一天神を認めざると共に亦神の子たる教祖を認めず、苟くも徳馨の人心を感化するものあり、功業の後世に照らすものあり思想の未來に傳ふべきものは之を敬讃するに吝ならず、仰ぎて先世を慕ひ、伏して後昆を慕む、只其れ是のみ、此の如くにして人生の意義初めて完きを得べく、活動の源泉混々として生ず、余輩は寧ろ世の有識と稱せらるゝ者の日本祖先教を渺視するを怪むなり。

## 下

以上の概論は日本の祖先教につき専ら其優的方面のみを觀察せるものなるが、天下もともり絶對の善美あるなく、利弊の相伴ふ糾繩の如くなるは社會事物の常態なるが故に、我が原始民族の悠古に起り、數千年を閱して今日に至れる祖先教の、人心に浸染せる甚だ深さと共に、其弊害の影響もまた大なるものあるを覺らざるべからず、徒に盾の一例を見て黄金なり鐵なりと斷ずるは

未だ道に忠なるものといふべからず、今之を具體的に列擧するは敢て難しとする所にあらざるも、煩説碎論は只讀者の厭倦を速ぐのみ、暫く筆を其歴史の概論に止めざるべからず

按ずるに日本祖先教は民族特異の性情に根源するといへども、他の宗教の如く教祖若くは大豫言者と稱する偉大なる人物の出現に依りて、教典教範を打立てられたるにあらず、纔に零碎なる傳説を集め以て訓言の資に供せるに過ぎず、而も其傳説なるものは大抵蒙昧時代の出來事に屬するが故に、人智漸く進み、社會状態のやゝ綜錯を來すに従ひ、百種の缺陷次第に生じ、從て填むれば從て露るゝを免れ得ず、中世に至り頼ひに大陸文明の輸入に接し、儒佛兩教の思想を餽補綴して、やゝ觀るべきの面目を保ち得たりしも、之が爲に祖先崇拜の意義に大なる變化を來し、印度婆羅門の弊習何時となく侵入し、禍福吉凶の祈禱を専らとするに至り、祖先教の妙趣索然として其八九分を失へり、固より如何なる宗教の歴史を釋ぬるも、時代と場所とに依りて變化せるの事實は歴々として徴すべく、畢竟宗教といひ道德といふも社會の一

現象に外ならざるを以て、進化の法則以外に超立し得ざるは勿論にて、變遷の多きものはそれだけ勢力を維持し、原始状態を脱する能はざるものは遂に衰亡に歸するは争ふべからざるの事實なれば、日本祖先教が大陸文明の影響を被りて著大の變化を起したるは寧ろ當然といふべきも、坦々たる大道の眼前に展開しあるにも拘らず、荆棘滿途の傍逕を取り、自ら求めて祖先教特有の精神を没却せんとするの有様を呈したるは、たとひ時代の然らしむる所なりとはいへ、當時の指導者が集大成の能力を缺きしを惜まざる能はず、是より以降祖先教の勢力は次第に盛まり、佛教（寧ろ外道）の一派たる修驗者の側に寄食して、僅に生存を保つての觀なきにしもあらざりしが、萬古相傳の精神は遂に未だ灰とならず、王政復古の前後に際し俄然として、自覺する所あり、當時國內の神官等相呼應して、一時熾なる運動を爲し、佛徒の伴食たる境遇を脱して、舊時の獨立に復するを得たるも、多くは政治的意味に重きを置き其 皇室と密邇せる關係あるを利用し、皇權の保護に依りて其發達擴張

を謀らんとするの手段を取りしは、是れはた不見識の極みにして、管に累を皇室に及ぼすのみならず、亦自ら腐敗沈淪を招くの媒介を爲せるに過ぎざりき。

此の如く日本祖先教の側面は頗る暗黒の歴史に富めりといへども、是れ只局に當るもの其人の罪のみ、實際國民は此等許多の曲折あるに拘らず、祖先教に對する確固たる信念は終始不變なり、曾て寺院を焚き、曾て佛像と梵鐘とを鑄潰し、曾てキリシタンを屠り、曾て繪踏を爲して悔いざりし國民は、未だ曾て一指だも祖先の祠に觸れざりしにあらずや、國民は實に佛を禮拜し經文を讀誦するの傍、未だ曾て産土神の參詣を怠らざりしにあらずや、凡そ日本國語を使用する人民にして一戸たりとも伊勢神宮の守護札を安置せざるものありしや、若し局に當るものをして固陋の見と頑愚の我執とを去り、世界文明の大勢に通じ、深思遠觀して以て民族性情の歸着點に一致する合理的組織を企てしめなば、國民の趨歸する水の低きに就くが如くならんのみ。

○附 録

余輩は今や本論を終結すべき時機に達せり、爰に再び大隈伯の意見を顧ざるべからず、伯はいへり凡そ人類には共通の善若くは悪あり、必ずしも宗旨の異同に拘らず、之を參酌捕捉して合理的に組織するは最も進歩せる國民の事業なりと、由來我が國民の同化力は甚だ強盛にして、佛敎を同化し儒敎を同化し今や基督教をも同化して日本のたらしめんとしてあり、然るに特有の祖先敎のみ頭を擡げて煥乎たる大光明を發し能はざるは獨り何ぞや、余輩は彼の局に當る者の情弱を悲み、我が民族の爲に長大息を禁じ得ず。

(明治三十八年十二月稿)  
(山陽新報所載)

明治四十一年四月五日印刷  
明治四十一年四月十日發行

金光御前觀奧付  
定價金四拾五錢



著 作 者	岡 山 縣 岡 山 市 七 軒 町 二 十 三 番 地
發 行 者	早 田 玄 洞
發 行 者	大 阪 市 四 區 京 町 堀 通 四 丁 目 壹 番 地
發 行 者	能 勢 健 治
發 行 者	大 阪 市 北 區 四 野 田 堀 甲 町 南 之 丁 百 拾 九 番 地
發 行 者	岡 本 庄 三
發 行 者	大 阪 市 四 區 阿 波 座 中 通 二 丁 目 二 百 七 十 一 番 地
發 行 者	岩 井 龜 次 郎
發 行 者	大 阪 市 四 區 京 町 堀 通 四 丁 目 壹 番 地
發 行 者	能 勢 修 身 堂
發 行 所	振 替 貯 金 口 座 七 六 五 二 番

販 賣 所

大 阪 梅 田 驛 前	盛 文 館
備 中 玉 島 町 中 國 民 報 支 局	龜 山 芳 太 郎
岡 山 市 四 大 寺 町 四 十 二 番 地	與 田 金 正 堂
岡 山 市 大 字 上 之 町 五 十 五 番 地	會 社 細 謹 舍 書 店



格人 從一位子爵福羽美靜君題歌 河上權大・教正・序  
修好の安 文學士黒住宗武君跋 大阪朝日新聞記者牧放浪君著

# 黒住宗忠

洋裝菊版二百五拾頁  
定價並製四拾五錢  
郵税金並上六錢

本書は一昨大阪朝日新聞に數拾回連載し、趣味と實益とを興へたる原著に更に補訂を加へ、年々宗教界は固より學者教育者界より賣切の偉人宗忠を研究せんとするの士は必ず一本を購讀せらるべし。其心靈上、少ならずるべし。

東京二六新聞曰く、  
黒住宗忠傳（牧放浪著）連門教天理教など、同一に迷信教視せられ居る黒住教の教祖黒住宗忠を傳して、黒住教の眞髓を發掘したるものなり。之に由つて見れば、黒住宗忠は近世の偉人なり。崇高なる人格を具へ、雄大なる識見を抱懐せし大宗教育家なるが如し。而して著者は、黒住教の立場より、あらすして研究者としての見地より、説論評し之を証するには、宗忠の手簡記録、他皆信據すべき資料を引き來り、たれば、吾人を以て首肯せしむる節多し。全體を略傳、天命直授、人生觀、宇宙觀、神人合一、天照大神、治病、傳道、不立文字、逸事、高弟傳、結論の諸項に分ち、少しも系統立ちたる説述なき者なり。而して、結論に於て、著者が思想を分類したる著者の勞は大なり。兎に角、黒住教の爲めには、文章老練、圓熟なり。尙強ひて注意を云へば、著者が思想の比較を、王陽明のみに取りたるは、些か物足らぬ心地す。宗忠の思想は、基督とも似通へる點大に少からず。吾人は他人を逸するも、基督との比較は、必ず試みて貰はざる可らざる點二三は、必ずあるべきを信するなり。

發行所

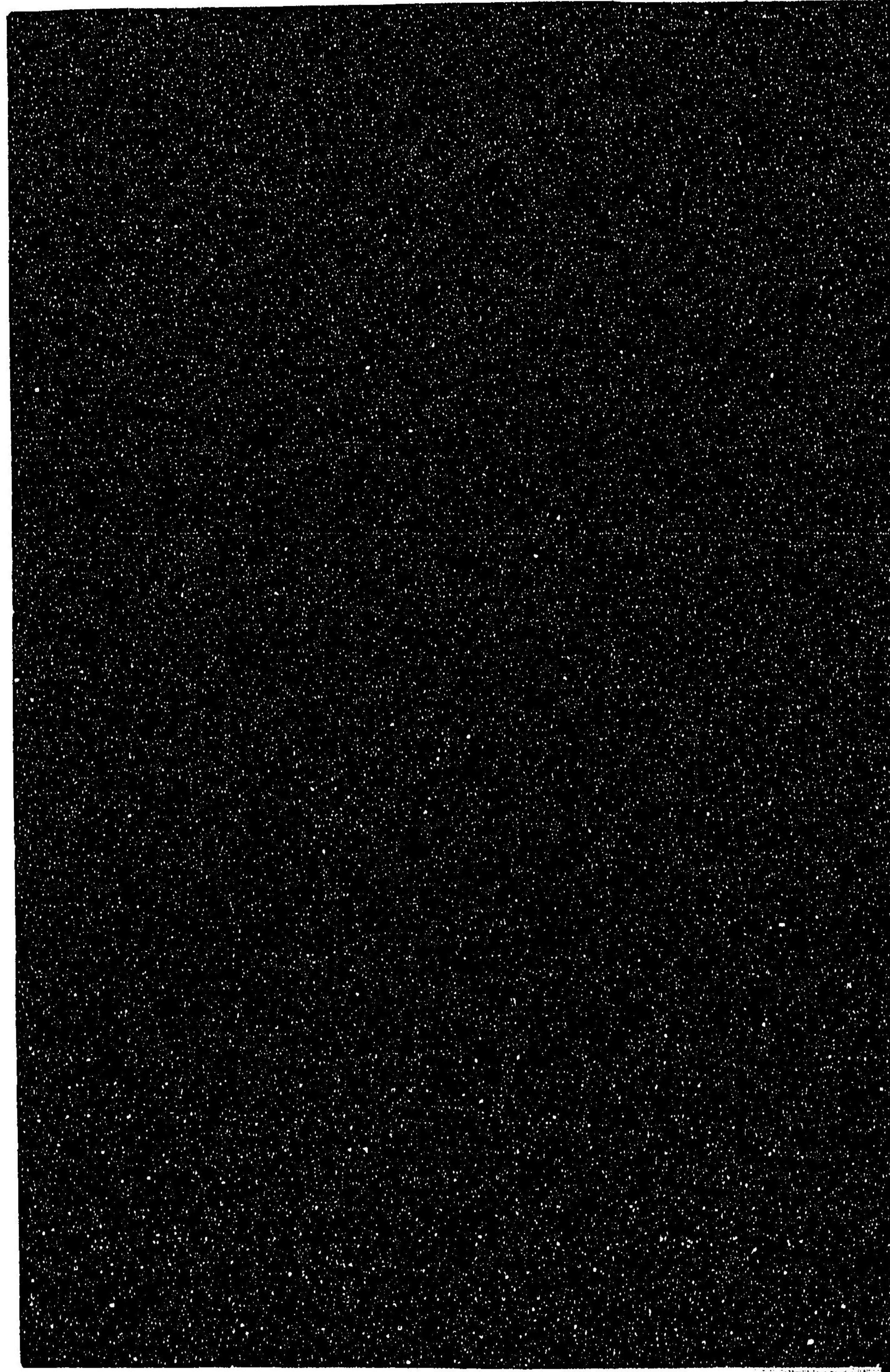
大阪市西區京町堀通  
四丁目千秋橋北詰

能勢

修身堂

振替貯金口座七六五二番

324  
178



49

324  
78